第46回

全日本仏教徒会議

山梨・身延山大会

「共に生きる尊さ」

～だれも取り残さない社会の実現に向けて～

大会紀要

第46回 全日本仏教徒会議 山梨・身延山大会

紀　要

大会テーマ・SDGsについて …… 1

ご挨拶・祝辞 …… 2

大会日程 …… 13

大会宣言 …… 20

閉会にあたり・謝辞 …… 21

記　録

記念講演 …… 22

身延山現代音楽法要『オラトリオ日蓮聖人』 …… 34

パネルディスカッション

問題提起・コーディネーター …… 35

パネラー紹介 …… 42

ディスカッション …… 49

資　料

実行委員会一覧 …… 60

参加人数・協賛団体一覧 …… 61

ブース出展団体一覧・報道（紙面より） …… 62

FSC www.fsc.org ミックス 紙 | 責任ある森林管理を支えています FSC® C006414

UD FONT by MORISAWA

ユニバーサルデザイン（UD）の考え方に基づき、より多くの人に見やすく読みまちがえにくいデザインの文字を採用しています。
On the basis of the policy of universal design (UD), easy to understand and easy to read character designs are used.

大会テーマ

『共に生きる尊さ』

～だれも取り残さない社会の実現に向けて～

今大会のテーマは、2015年の国連サミットでの全会一致の採択以降全世界が積極的に取り組み始めた「持続可能な開発目標（SDGs)」に沿ったものであります。地球上の「誰一人取り残さない」ことを誓っているSDGsは先進国のみならず発展途上国も取り組んでいるユニバーサル（普遍的）なものであり、我が国日本も積極的に推進しております。

未曽有のコロナ禍で世界中が危機に陥り共通の危機感を抱いている昨今、世界の人々が地球の人類の現状と未来に対し強い問題意識を持ちSDGsの機運が高まっているといえるでしょう。まさしくコロナ禍の終息が見え始めた本年に相応しく、SDGs時代における仏教の役割を考える端緒となりえるテーマであります。

持続可能な開発目標 ＳＤＧｓ（エス・ディー・ジーズ）とは

持続可能な開発目標（SDGs：Sustainable Development Goals）とは、2001年に策定されたミレニアム開発目標（MDGs）の後継として、2015年９月の国連サミットで加盟国の全会一致で採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載された、2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標です。

17のゴール・169のターゲットから構成され、地球上の「誰一人取り残さない（leave no one behind)」ことを誓っています。

SDGsは発展途上国のみならず、先進国自身が取り組むユニバーサル（普遍的）なものであり、日本としても積極的に取り組んでいます。

『外務省ウェブサイト』より

ご 挨 拶

公益財団法人 全日本仏教会 会長
第46回 全日本仏教徒会議 総裁
真宗大谷派 門首
大 谷 暢 裕

このたび、第46回 全日本仏教徒会議 山梨・身延山大会が開催されますにあたり、全日本仏教会を代表してご挨拶を申し上げます。

はじめに、新型コロナウイルス感染症の影響により、開催期日の延期に加え、規模の縮小や内容の大幅な変更を余儀なくされた前回大会（第45回 島根大会）を経て、未だ感染症への不安が払拭しきれない中ではありますが、本大会の開催を無事にお迎えできましたことを大変慶ばしく思います。また、このような状況の中、懸命にご準備いただきました大会実行委員会をはじめ、山梨県仏教会並びに関係者の皆さまに深く感謝申し上げます。

さて、現代社会は、政治的・経済的に混迷を深めており、多くの人々が先行きの見えない未来への不安を抱えています。とりわけ、いま世界的な問題となっている国家間での紛争においては、人が人を憎しみ、傷つけ合い、多くの尊い命が失われております。

仏陀は、「すべての者は暴力におびえる。すべての生きものにとって生命は愛しい。己が身にひきくらべて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ」と、非暴力を貫く生き方をお示しされるとともに、まず自分自身の身に引き当てて、暴力について考えなくてはならないと説かれました。昨今の国際情勢に鑑みますと、「真の平和」の希求には、この世に生を享けた人間一人ひとりが互いに尊重し合い、武力の行使ではなく、どこまでも積極的な“対話”をもって相手と向き合う姿勢が必要不可欠であると強く思う次第であります。

本大会のテーマは「『共に生きる尊さ』～だれも取り残さない社会の実現に向けて～」であります。みなが共に、安らかに生きるにはどうしたらよいのか。これは、思想信条や国籍、立場の違いを超えた人類共通の課題ではないでしょうか。もちろん、簡単に答えを出すことはできませんが、人びとの苦悩と向き合い、誰一人として取り残されることがあってはならないという思いを一つにして、多様な人びとが考えを持ち寄ってこの困難な問いを共に語り始めることは、重要な一歩であるはずです。本大会の取り組みが、仏陀の「和」の精神のもと、さらなる仏教文化の宣揚、世界平和への確実な歩みとなることを切に念願いたしまして、私のご挨拶といたします。

ご 挨 拶

公益財団法人 全日本仏教会
理事長　里　雄　康　意

ここ山梨県身延の地にて、第46回 全日本仏教徒会議 山梨・身延山大会が開催されますこと心よりお祝い申し上げます。振り返りますと、この地で全日本仏教徒会議が開催されますのは1955年の第３回大会以来、実に67年ぶりとなりました。新型コロナウイルス感染症が終息しない中、皆様のご尽力により本日の開催に至ったことに厚く御礼を申し上げます。

全日本仏教徒会議は、日本の仏教徒が宗派を隔てることなく交流・団結し、それぞれの時代において、さまざまな社会の課題を討議して、その解決に力を尽くす為に開催されてきました。いま社会問題となっている新型コロナウイルス感染症をとりましても、病が社会の在り方にまで影響を与えております。かかる医療関係の問題はもとより、学業や労働、経済などあらゆる分野において私たちに悩みと苦しみを突きつけ、そこに取り残され孤立する人たちを生み出しております。また戦争や紛争などで人と人が傷つけあい、彼我共に悲しみを作り出す痛ましい出来事が世界各地で毎日のように起こっており、立場の弱い人々が虐げられています。

そのような中にあって私たち仏法を戴く者は、この時代における社会の中で何を問うべきなのか。今大会のテーマ「『共に生きる尊さ』～だれも取り残さない社会の実現に向けて～」が与える緊張感は、突き付けられた課題として、お互いに関係しながら生きている私たちに対し、自分さえ良ければそれでよいという生き方を考え直さなければならないという呼びかけであります。

この大会の開催によって、それぞれの立場や思想信条などを超えて、どこまでも他者と水平に出会う道を見いだし、共にこの課題に向き合う機縁になればと念じます。

最後に大会の開催に向けて心身ともに尽くされた山梨県仏教会をはじめとした実行委員会の皆様、会場である身延山久遠寺の皆様、ご関係いただいた多くの皆様に重ねて感謝申し上げご挨拶とさせていただきます。

ご 挨 拶

第46回 全日本仏教徒会議
山梨・身延山大会 会長
山梨県仏教会 会長
近　藤　英　夫

皆様本日は、ようこそのお参りでございます。昨年10月２日、第45回 全日本仏教徒会議 島根大会において、１年後には山梨・身延山大会を成功させなくてはという身の引き締まる思いで大会旗を引き継ぎました。このように全国各地から多くの仏教徒の皆様をお迎えし第46回 全日本仏教徒会議 山梨・身延山大会を開催することができました。本日はお忙しい中で、身延町町長望月幹也様、衆議院議員堀内のり子様をはじめ多くの御来賓の皆様のご臨席を賜り、心より感謝申し上げます。

さて本大会のテーマであります。だれも取り残さない世界の実現は、国連サミットで採択された SDGs に沿ったもので、地球上の誰一人取り残さないという大きな目標になっています。さまざまな問題を抱えている世界を持続する世界に変革しようとするためには、どうしたらよいか、何をすべきなのか、ということを考える取り組みとなっております。目標に持続可能としているのは、このままでは持続することが不可能であると考えられているからです。

私たちがこれまで行ってきた開発の裏には、自然や環境破壊の原因となった物もあります。特に気候変動が多くの人々に影響を与える深刻な問題となっております。国内でも線状降水帯といわれる雨雲が発生し比較的狭い地域で、100mm 以上の雨が降ったりしています。そして気候変動によって今まで野菜が作られていた地域で、その野菜が育てられなくなったり、海流が変化して魚が捕れなくなったり、台風などが多く発生したりするようになっております。二日間の大会日程となりますが、山梨県内は勿論、全国から多くの仏教徒の皆様をお迎えし、本大会のテーマに沿った活発な議論が進められると思います。そして将来の世界、地球のために仏教徒として私たち一人一人が取り組んでいくべきことについて、提言していきたいと考えております。

最後となりましたが、本大会の準備にこの１年間休日も返上してご尽力頂いた実行委員の皆様。大会会場となりました身延山久遠寺の皆様。県内各御寺院と連絡調整をしていただきました理事の皆様。準備会当初から適切なご指導ご協力をいただきました全日本仏教会の皆様。そして協賛広告にご協力いただきました多くの皆様方に厚く御礼を申し上げます。終わりに仏教益々の興隆と大会にお集まりの仏教徒の皆様のご健勝ご活躍を祈念申し上げまして挨拶とさせていただきます。

ご 挨 拶

第46回 全日本仏教徒会議
山梨・身延山大会 実行委員長
松　永　直　樹

第46回 全日本仏教徒会議を真宗大谷派 大谷暢裕御門首をお迎えして、山梨県身延山にて開催することとなりました。全国から訪れて頂く皆様方を心より歓迎申し上げます。

新型コロナウイルスの終息が未だに見えない中ではありますが、感染防止を徹底する中で、この度実施できますこと、また大会の成功を目指して頑張っていただいた関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

山梨県では、昭和30年の第３回身延山大会以来、67年ぶりの全日本仏教徒会議の開催となります。

身延山久遠寺は、鎌倉時代に日蓮聖人によって開かれたお寺で日蓮宗の総本山で、ちょうど来年（令和５年）には日蓮聖人身延ご入山750年を迎えます。このめでたい時に、こうして本大会が実施できます事、大変光栄に思います。

大会のテーマに定めたのは、「『共に生きる尊さ』～だれも取り残さない社会の実現に向けて～」とし、2015年の国連サミットで採択された17の「持続可能な開発目標（SDGs)」に沿ったものであり、地球上の「誰一人取り残さない」ことを誓うユニバーサルな目標です。その中で、私たち仏教徒にとって心がけたいのは、目標16に掲げられた「平和と公正をすべての人に」ではないでしょうか。

今年２月に起こったロシアとウクライナの戦争は、国際社会の平和と秩序、安全を根幹から脅かすものであり、また両国にとっても決して得策ではありません。一日も早い戦争終結を望むものです。

山梨・身延山大会がお釈迦様の教えのもとに、みなが手を取り合って、醜い争いや差別のない平安な社会づくり、ひいては世界平和の架け橋となることを願っています。

本大会を開催するにあたり、ご指導ご協力を頂きました、大谷暢裕会長をはじめとする全日本仏教会の皆様に感謝申し上げます。

結びに、大会にお集まり頂きました仏教徒の皆様方のご健勝ご活躍をお祈り申し上げ挨拶と致します。

สำนักงานใหญ่
องค์การพุทธศาสนิกสัมพันธ์แห่งโลก
616 ในอุทยานเบญจสิริ
ซอยสุขุมวิท 24 แยกซอยเมธีนิเวศน์
ถนนสุขุมวิท เขตคลองเตย กรุงเทพฯ 10110
โทร : 02 661 1284-7 โทรสาร : 02 661 0555

Website : www.wfbhq.org
E-mail : wfb_hq@truemail.co.th

HEADQUARTERS
THE WORLD FELLOWSHIP OF BUDDHISTS
616 BENJASIRI PARK
SOI MEDHINIVET OFF SOI SUKHUMVIT 24
SUKHUMVIT ROAD, BANGKOK 10110, THAILAND
TEL : +66 2 661 1284-7 Fax : +66 2 661 0555

Congratulatory Message from
H.E. Phan Wannamethee
President of the World Fellowship of Buddhists
on the 46th General Conference of Japan Buddhist Federation
Minobusan Kuonji Temple, Yamanashi Prefecture
7-8 October B.E.2565 (2022)

On behalf of the World Fellowship of Buddhists (The WFB), its sub-organizations – the World Fellowship of Buddhist Youth (WFBY), the World Buddhist University (WBU), all Regional Centres and its networking organization, I would like to convey my sincere congratulations to the Most Venerable Choyu Otani, President of the Japan Buddhist Federation (JBF), Reverend Hideo Kondo, Chairperson of the General Conference Committee for hosting the 46th General Conference of JBF from 7-8 October B.E. 2565 (2022) at Minobusan Kuonji Temple, Yamanashi Prefecture.

At present conventional development model has led to individual and social conflicts. Buddhist approach to development can be applied for more peaceful, harmonious, and happy societies. The practice of generosity in Buddhism is largely entwined with the mind. Far more important is the intention and state of mind when giving. Genuine compassion is based not on our own projections and expectations, but rather on the well-being of the other. Buddhism encourages true compassion have no territorial bounds – it is freely offered and received. Hence, compassion and a good heart are not only important at the beginning but also in the middle and at the end. We should remember that not just we but everyone has to undergo suffering. This realistic perspective will increase our determination and our capacity to overcome troubles. Each new obstacle can be seen as yet another valuable opportunity to improve our mind, another opportunity for deepening our compassion; that is, we can develop both genuine sympathy for others' suffering and the will to help the other.

The theme of the 46th General Conference of the Japan Buddhist Federation on "The Preciousness of Living Together - Toward a society where no one is left behind" is timely to be discussed and derive the way to assist people in this difficult time that we are facing both of pandemic and calamity. On this special occasion, I wish you all success in your participation at the 46th General Conference of Japan Buddhist Federation.

May the grace of the Holy Triple Gem and by the blessing of Dhamma be endowed all of you with health and happiness in life.

Phan Wannamethee

Phan Wannamethee
The World Fellowship of Buddhists

祝　　辞

WFB 世界仏教徒連盟 会長
パン・ワナメッティ

この度、山梨県身延山久遠寺に於いて第46回 全日本仏教徒会議が10月７日、８日の日程で開催されるにあたり、大谷暢裕全日本仏教会会長、また近藤英夫大会会長に対し、WFB 世界仏教徒連盟、および傘下組織である WFBY 世界仏教徒青年連盟、WBU 世界仏教徒大学、各国 WFB 地域センターと関係団体を代表し、心からのお祝いを申し上げます。

従来の開発の在り方は、今日の個人的、社会的な対立を生み出しました。しかし仏教的な開発のアプローチは、より平和で調和のとれた幸せな社会のために適用できます。仏教において善根の実践は、その心に深く繋がっています。他者に与えるときの意図と心の在り方が遥かに重要なのです。真の慈悲は、私たち自身の予測や期待に基づくのではなく、相手の幸福に基づいています。仏教は、真の慈悲を奨励しています。真の慈悲に領土の境界はありません。真の慈悲は惜しみなく提供され、遠慮なく受け取られます。したがって、慈悲と善良な心は、最初だけでなく、途中や最後にも大切なのです。苦は自分たちだけでなく、誰もが経験することだということを忘れてはなりません。このように現実を見る態度は、私たちが問題を克服するための決意と能力を高めます。目前に訪れる試練一つ一つが自らの心を改善するための貴重な機会であり、自身の慈悲を深める機会であると見ることができます。つまり、他人の苦しみに対する真の共感と、相手を助けたいという意志の両方を育むことができます。

今大会のテーマ「『共に生きる尊さ』～だれも取り残さない社会の実現に向けて～」が時宜を得て議論され、パンデミックや災害という困難を伴う時代に、人々を助ける方法が導き出されることを願います。第46回 全日本仏教徒会議 山梨・身延山大会の成功をお祈りいたします。

三宝と仏法のご加護と、皆様のご健康と幸福な日々をご祈念いたします。

ご 挨 拶

公益財団法人 全日本仏教会 副会長
第46回 全日本仏教徒会議 副総裁
五 條 良 知

本日は第46回 全日本仏教徒会議 山梨・身延山大会にようこそお運びをいただきました。私は日本一の桜の名所、修験道の根本道場、奈良県の吉野・大峯、金峯山寺から参りました五條でございます。ご覧の通り若輩ではございますけども、主催の一つ全日本仏教会を代表させていただきまして一言ご挨拶を申し上げます。

皆様ご承知の通り、二年半前から日本は、世界は、ずいぶんと酷い目に遭って参りました。一人一人が分断と言われる中で、つらい思いをし、また今なお収まろうとしていないように感じられる中、この大会を去年の島根大会に引き続きまして止めることなくさらに発展して今日開催をいただきました山梨県仏教会の皆様、そしてお力添えをいただきました身延山久遠寺の皆様方、また地元の方、関係各位には、心より御礼申し上げますと共にこの大会が大変ありがたく喜ばしいものであると存じておる次第であります。

また全日本仏教会の事務総局の皆様におかれましてもずいぶんと今日に至るまでご苦労をいただいたように拝察をしております。そのご苦労が、実行委員の皆様のご苦労がこの開会式で、鈴木副委員長様の式辞、そして近藤会長様のご挨拶、そして久遠寺の御法主内野猊下のお言葉を頂戴しまして、ほぼ大成功に開催されたと私は思っております。後はここにおいでの諸大徳、おいでの皆様が特異な発展を遂げました日本仏教の仏教徒が集うこの対話の中で、共に生きる尊さ、誰も取り残さない社会の実現に向けて、その思いをお帰りになってから、御信徒信者さん、お家の方、地域の方、一人一人にお伝えをいただいて、誰も取り残さないぞというその想いをひとりでも多くの方が持っていただいたならば、この世の中もう少し住みやすくなるはずと思っております。

是非今日が皆様とともによき対話の会になって、お釈迦様の和の精神、慈悲の心が広く深く通じますようにお力添えをお願いを申し上げまして、また皆様方のご健勝を御祈念申し上げましてご挨拶に変えさせていただきたいと思います。

ご 挨 拶

日蓮宗総本山身延山久遠寺
第92世法主
内　野　日　総

全日本仏教徒会議は昭和28年８月に高野山で第１回が開催されました。ここ山梨県の身延山で開催されるのは、昭和30年の第３回大会以来67年ぶりとなります。

昭和、平成、令和と時代が変化する中、先師が脈々と仏教伝道に精励され、数多の信徒が信心を積み重ねてこられた仏教徒会議が、再び身延山久遠寺で開催されることに歴史の重みを実感いたします。同時に、実に光栄であり、全国各地からご来県くださいました皆様を心より歓迎申し上げます。また、本会議の開催にご尽力いただいた公益財団法人全日本仏教会をはじめ山梨県仏教会ならびに大会実行委員会ご関係の各聖各位の努力精進に、衷心より御礼申し上げる次第でございます。

身延山の歴史は今から749年前まで遡ります。争乱や地震、飢饉、疫病などが相次いだ鎌倉時代、『妙法蓮華経』の教えによって人々を救おうと布教に努めていた日蓮聖人は文永11年（1274)、鎌倉幕府の御家人であり信者であった南部実長公の招きに応じ、実長公の領地であった甲斐（山梨県）身延山にご入山されました。鎌倉から日蓮聖人が来られたことで多くの文化が伝承され、今日に至っております。身延山周辺は豊かな自然と、「和紙の里」「大工の里」「硯の里」「はんこの里」などの伝統が息づく文化的な地域です。

現在、人類はコロナ禍をはじめ多くの試練に翻弄されています。日蓮聖人が生きた中世日本も戦乱や貧困から逃れる術がなく、民衆にとって困難に満ちた時代でした。現代と比べ、圧倒的に情報が少ない時代、智慧で逆境を乗り越えるしかなかったことでしょう。一方、情報洪水社会の現代においては、極端な意見や言論が耳に入りやすくなっており、今後はサイレントマジョリティー（声なき声）や、声を上げられない人の心の叫びをいかに汲むかが、仏教徒にとって必要な取り組みになっていくことでしょう。

本大会のテーマ「『共に生きる尊さ』～だれも取り残さない社会の実現に向けて～」を、どのようにして実現するか、活発な議論を通じて端緒をつかんでいただければ幸いです。変化の激しい今こそ、人の善を信じる心や、世の中を良い方向に動かしていこうという意志を強く持っていこうではありませんか。

結びに、本大会の取り組みで、仏陀釈尊の智慧と慈悲の心を鑽仰される皆様方が、自己の人生に志高く精進される一助となりますようご祈念申し上げてご挨拶と致します。

祝　　辞

山梨県知事
長　崎　幸太郎

第46回 全日本仏教徒会議が、富士山や南アルプスなどの豊かな自然に恵まれた、ここ山梨の地において開催されますことをお慶び申し上げますとともに、全国各地からお越しいただいた皆様を心から歓迎いたします。

この度、昭和30年の第3回大会以来、実に67年ぶりに山梨県で開催される運びとなりました。開催に向け御尽力された公益財団法人全日本仏教会及び山梨県仏教会をはじめとする関係者の皆様に心より感謝申し上げますとともに、皆様にはこれまで長年にわたり、世界平和に貢献されていることに深く敬意を表します。

本大会のテーマは「『共に生きる尊さ』～だれも取り残さない社会の実現に向けて～」であります。これは、地球上の「誰一人取り残さない」ことを誓う「持続可能な開発目標（SDGs)」の理念に沿ったものであり、コロナ禍で世界中が危機に陥り共通の危機感を抱いている昨今、まさに時宜を得たテーマであると考えます。山梨県におきましても、弱者を生み出さず、困窮を見逃さず、誰一人として置き去りにしない「包摂的な社会」を目指し、ひきこもり、ヤングケアラー、DV、いじめ・不登校など、様々な課題に真正面から取り組んでいるところであります。

さて、山梨県は多くの果物を生産するフルーツ王国であり、特に、ブドウ・桃・スモモは日本一の生産量を誇っています。また、ワイナリー数は国内最多、日本ワイン生産量も日本一を誇る「ワイン県」でもあります。会議に参加される皆様には、是非この機会に、フルーツ、ワイン、日本酒や温泉など、美しい風土の中で育まれた山梨ならではの魅力を御堪能いただければ幸いに存じます。安心して御利用いただけるよう、県が認証した「やまなしグリーン・ゾーン認証施設」では、徹底した感染症対策を講じて皆様をお待ちしております。

結びに、本大会の御成功と公益財団法人全日本仏教会及び山梨県仏教会の御発展、並びに御参会の皆様方の今後益々の御活躍をお祈りいたしまして、お祝いの御挨拶といたします。

祝　　辞

身延町長
望　月　幹　也

第46回 全日本仏教徒会議 山梨・身延山大会がここ身延町で開催されますことをお祝い申し上げるとともに心より歓迎申し上げます。

また大会の実施にあたり、コロナ禍により何かと大変ご苦労が多かったこととご拝察いたしますが、関係者の皆様の御尽力に深く感謝と敬意を表します。

さて、身延町は山梨県の南部に位置し、町の中央を北から南に流れる日本三大急流のひとつである富士川を中心に、周囲を緑豊かな山々に囲まれた歴史と文化にあふれる町です。千円札に描かれた本栖湖の「さかさ富士」、戦国武将である武田信玄公が戦の傷を癒したとされる「下部温泉郷」に加え、手漉きの高級和紙として全国の書道家に愛用されている「西嶋和紙」、大嘗祭に供納し全国的にもトップクラスの大きさと甘さを有する町の特産品「あけぼの大豆」は、特に10月の枝豆を求めて近隣都県から多くの観光客が訪れるなど、様々な観光資源を有しております。

そして本大会が開催される日蓮宗総本山身延山につきましては、日蓮聖人が1274年（文永11）にこの地に入山されてから、まもなく開闢750年を迎えます。古来から多くの皆様が、さまざまな思いを寄せ、訪れ、祈り、修行をされてきた聖地であり、歴史と信仰が息づく霊山であります。

同時に荘厳な仏閣と樹齢400年と云われるしだれ桜、秋の紅葉など四季折々の佇まいは、山梨を代表するパワースポットとしても親しまれております。

本大会テーマ「『共に生きる尊さ』～だれも取り残さない社会の実現に向けて～」は、「持続可能な開発目標（SDGs）」に沿った趣旨でありますが、それぞれのお立場において、誰一人取り残されない社会に向けて、産業の在り方、世界の繋がり方、課題解決の仕方などあらゆる側面での変革が求められております。身延町では令和３年度に策定した第２期身延町総合計画（後期計画）において、全ての項目にこのターゲットを位置付けて、町政に取り組んでいるところです。関係の皆様とともに手を携えて「共生の社会」実現を目指していきたいと考えております。

結びに、本大会のご成功と公益財団法人全日本仏教会及び山梨県仏教会の益々のご発展、並びにご参会の皆様のご健勝とご活躍を心より祈念申し上げお祝いの言葉といたします。

祝　　辞

衆議院議員
堀　内　詔　子

身延山久遠寺に本日、全日本仏教徒会議の皆様方が多数ご参集になり「第46回全日本仏教徒会議山梨・身延山大会」がご盛会に開催されましたことを心からお祝い申し上げます。

長い間、内野法主猊下をはじめ皆様方は、共に生きる、誰一人取り残さない、そういった想いを元に多くの皆様方を救ってきて下さいました。2015年の国連総会で採択されたSDGsの目標、これは私たち山梨県民のみならず日本全体、そして全世界の皆様方に必要な大切な目標であります。

私自身最後の東京オリンピック・パラリンピック担当大臣を３月31日まで務めさせていただきました。この東京オリンピック・パラリンピックは共生社会の実現を目指して行われ、障がいのある方もない方も、そして若者からご高齢の方まで、男性も女性も参加して、正々堂々と各種目で共に競い合い、共にお互いを認め合う大会でありました。この東京オリパラのレガシーをしっかりと引き継ぐこと、これは共生社会の実現、一人ひとり、しっかりとその存在を主張し、生きていく権利があるのだということを世界に発信するうえでも大切なことだと思います。

また兼務をさせていただいたワクチン接種推進担当としては、このワクチン接種の場面においても誰一人取り残さないことの大切さを痛感致しました。ある国ではワクチン接種がどんどんと進み、日本においても４回以上を接種なさった方々もいらっしゃると思います。一方世界では１回目の接種すら、思うように行う事ができない国もございます。そういった世界環境の中で変異株が発生し、ワクチン接種を順調に進めている国にもその変異株が入ってきて、また蔓延してしまう。このような厳しい循環を繰り広げております。

この新型コロナというウイルスと戦って行くには、誰一人取り残さない、全世界的にワクチン接種を進めていく必要性を身をもって痛感致しました。

これからも今日ご参会の皆様のお力をもって、全世界誰一人取り残されることなく救われ、そして生の喜びを味わって全うできるようにお力添えを賜りますこと、また、本大会が成功裏に終わることを御祈念申し上げ、お祝いの言葉とさせていただきます。

大会日程

大会初日　**令和４年10月７日（金）**

12:00　開場・受付開始

13:00　**開会式典**（大学講堂）

司会：大会事務局主任　　鈴木義俊師

UTY アナウンサー　小田切いくみ氏

開式の辞

大会実行副委員長

真宗大谷派春慶寺　**鈴木　哲**師

挨　　拶

大会会長　山梨県仏教会会長　浄土真宗本願寺派林照寺　**近藤英夫**師
大会副総裁　全日本仏教会 副会長 金峯山修験本宗管長　**五條良知**師
大会名誉会長　日蓮宗総本山身延山久遠寺　**内野日総**法主

祝　　辞

身 延 町 長
望月幹也様
衆議院議員
堀内詔子様

祝電等披露

第34期全日本仏教会会長　浄土真宗本願寺派門主 **大谷光淳**様
法華一乗会副会長　衆議院議員 **逢沢一郎**様
山梨中央銀行頭取 **関　光良**様
経済産業副大臣兼内閣府副大臣　衆議院議員 **中谷真一**様

13:20 **開会法要**（大学講堂）

導師　大会会長 山梨県仏教会会長　浄土真宗本願寺派林照寺 **近藤英夫**師

13:50　**記念講演**「現代における仏教の可能性を問う」

講師　**平岡　聡**氏

京都文教学園学園長・京都文教大学教授

15:00　記念講演終了

15:30　**身延山現代音楽法要**（本堂）

導師　大会名誉会長　日蓮宗総本山身延山久遠寺　**内野日総**法主

16:00　現代音楽法要終了

19:00　**交流懇親会**（下部ホテル）

司会：山梨県仏教会　**野澤愛紫**師

大会２日目　令和４年10月８日（土）

6:00　朝勤参列（任意）

8:00　開場・受付開始

各宗派キャラクター（左から）
　こうやくん（高野山真言宗）
　プトリ･プトラ（浄土真宗本願寺派）
　こぞうくん（日蓮宗）
　しょうぐうさん（天台宗）

9:00　**大会記念法要**（大学講堂）

導師

大会総裁　全日本仏教会会長

真宗大谷派　**大谷暢裕**門首

仏花担当　**杉平靖雄**師

9:40　**パネルディスカッション**（大学講堂）

テーマ「だれも取り残さない社会の実現に向けて」

コーディネーター　**小谷みどり**氏

シニア生活文化研究所代表理事

身延山大学客員教授

問題提起　「山梨県内寺院における SDGs 調査報告を受けて」

パネラー紹介

平岡　聡氏

京都文教学園学園長・京都文教大学教授

ロバート キャンベル氏

日本文学研究者・早稲田大学特命教授

早稲田大学国際文学館（村上春樹ライブラリー）顧問

東京大学名誉教授

内藤麻里子氏

文芸ジャーナリスト・元毎日新聞記者

ディスカッション

11:50　パネルディスカッション終了

12:00　**閉会式**（大学講堂）

大会宣言

大会実行委員長　日蓮宗實相寺　松永直樹師

大会旗受け渡し

～次期開催地大阪府佛教会へ

次期開催地代表挨拶　大阪府佛教会 会長　村山廣甫師

挨　拶

全日本仏教会　理事長　里雄康意師

閉式の辞

大会実行副委員長　高野山真言宗花園院　伊丹信匡師

記念撮影

大会宣言

本日、ここ日蓮宗総本山身延山久遠寺に於いて、全日本仏教会会長 真宗大谷派 大谷暢裕門首をお迎えし、「『共に生きる尊さ』～だれも取り残さない社会の実現に向けて～」をテーマに第46回 全日本仏教徒会議 山梨・身延山大会を開催いたしました。

新型コロナウイルスが猛威を振るいすでに３年が経ちますが、未だ終息には至っておりません。長期にわたる社会活動の低迷により、日々の生活すらままならない多くの人が、日本のみならず世界中にあふれています。

本年２月24日、ロシア軍によるウクライナ侵攻が始まりました。この理不尽な侵攻は８か月を経た今も続いており、先の見通しが全くつかないまま、ウクライナの人々に塗炭の苦しみを与え続け、核使用をちらつかせて恫喝するなど、世界中を震撼させています。一方で、この侵攻は、ロシア国内にも同様な思いの多くの人々を生み出しました。両国の、どれほどの尊い命が失われたでしょうか。戦死者と戦争被害者、そしてその家族の悲嘆は計り知れません。

SDGs には、持続可能な世界実現のための、平和や公正な社会の実現、不平等や貧困・飢餓をなくすことなど17の目標が定められています。しかし、現実は今回のテーマとした「だれも取り残さない社会の実現」とは逆の、弱肉強食社会に向かっています。

今回の記念講演やシンポジウムで、私たちが意識し、取り組まなければならない課題が見えてきたのではないでしょうか。一人ひとりが現実を直視し、行動することによって、世界中のすべての人々が等しく平和と安寧の日常を取り戻すことを心から願い、第46回 全日本仏教徒会議 山梨・身延山大会の閉会にあたり、以下のようにここに宣言いたします。

〈大会宣言〉

私たち仏教徒は、人は行いにより尊くも卑しくもなるという釈尊の御教えを強く受け止め、決して傍観者でいることなく今起きている現実に目を向け、生きとし生けるものが共に生きられる平和な社会の実現に向けて行動し、常に感謝の気持ちを持ちながら、互いを尊重し合う社会を目指すことを誓います。

令和４年10月８日

第46回 全日本仏教徒会議 山梨・身延山大会

閉会にあたり

第46回 全日本仏教徒会議
山梨・身延山大会 実行委員長
松　永　直　樹

ひと言、自戒を込めて申し上げたいことがございます。

今ロシア軍の非道なウクライナ侵攻問題を取り上げました。しかし私たちも仏教徒として考えなければならないことがあります。私たちと同じ仏教徒であるミャンマーの人たちにより、イスラム教徒であるロヒンギャの人たちが弾圧され難民化しています。このことは私たちも何らかのきっかけで弾圧する側に回る可能性があることを示しています。

改めて先ほどの宣言の中で述べた、互いに尊重し合う社会という言葉の重要性を皆様と共に考えたいと思います。

謝　辞

公益財団法人 全日本仏教会
理事長　里　雄　康　意

大変有意義な場と時間、そして身が揺さぶられるような場と時間、考えさせられる場と時間、大変ありがとうございました。第46回 全日本仏教徒会議 山梨・身延山大会閉会式にあたり一言御礼申し上げます。

コロナ禍が未だ収束しない中、本大会が無事に開催できましたのもひとえに山梨県仏教会の皆様をはじめ、身延山久遠寺のお役の皆様、また実行委員会の皆様の陰に日向にお力添えのおかげと、心より御礼申し上げます。特に実行委員会の皆様にはお忙しいお時間をさいて打ち合わせや会議と万般の準備を、受け入れを、いただきましたことここに深く感謝申し上げます。

混沌とした世情にあって「共に生きる尊さ～だれも取り残さない社会の実現に向けて～」を大会のテーマに据えて、記念講演では京都文教学園の平岡聡先生から現代における仏教の可能性をお示しいただきました。またパネルディスカッションにおいて各先生のお話から、大変刺激を受け、誰も取り残さない社会の実現に向けて私たちが具体的に実践すべきことが明らかになったと思います。

ここにご出席の皆様はそれぞれのご宗派に所属しておられますが、そういった枠を超え、お釈迦様の弟子の一人として、一仏教徒として、共に手を携えて歩まねばならないことを改めて確信いたしました。全日本仏教徒会議の法（のり）の輪がどこまでも広がり、平和な世界の実現に繋がることを念じあげまして御礼の言葉といたします。

記念講演

「現代における仏教の可能性を問う」

講師

平岡　聡 氏

京都文教学園学園長・京都文教大学教授

プロフィール

京都文教大学 臨床心理学部 臨床心理学科 教授
専門は仏教学（インド仏教）
佛教大学大学院博士課程満期退学
博士（文学）
浄土宗教師
著書に『鎌倉仏教』（KADOKAWA）、『菩薩とはなにか』（春秋社）、『南無阿弥陀仏と南無妙法蓮華経』『親鸞と道元』（新潮社）、『法華経成立の新解釈―仏伝として法華経を読み解く―』（大蔵出版）など。

みなさん初めまして。マスクは外させていただきます。距離がありますので。時間が押しているということで、明日の朝までだったら大丈夫だと言われましたので喋ろうと思えば喋れるんですが、死人が出てもいけませんので、大体70分ぐらいを見当にお話しをさせていただければと思います。

今年の１月でしたか、この話を伺いまして、何をお話しさせていただこうかと色々考えました。私は浄土宗の僧侶でございます。ただし端くれの僧侶ですけれども。さすがに身延山で日蓮聖人の御前において念仏の教えはないだろうということでね。勿論いろんな宗派からお集まりだということですので、通仏教的と言うか、あまり一宗一派に囚われない話が当然良いだろうと思い、少し大げさですけれども「仏教の可能性を問う」というタイトルにさせていただきました。お手元に資料をお配りしていると思いますので、それを見ていただきながらお話を聞いていただければと思います。

今日の講演の流れを大雑把にお伝えしておきます。まず先ほど三帰依文という偈文を皆さんで一緒に唱和いたしました。「仏法僧」の三宝に帰依をするということでお唱えしたわけですけれども、それに沿って今回は「仏法僧」の三宝という枠組みから仏教の可能性を考えてみようと思います。順番は２番目の「法」を先にやって、３番目の「僧」を２番目にやって、最後に「仏」について、仏教の可能性ということについて論じてみたいと思います。

まずよく仏教が批判されるのに、仏教は現代の問題に全然対応していないじゃないかということがあります。葬式だけして今の問題と向き合っていないではないかといったご批判を一般の方からは受ける。そういうことを踏まえて、じゃあ一体社会というのが、どういう方向にこれから進んでいくんだろうかということを私なりに押さえて、そしてそういった問題に仏教は本当に応えうる宗教なのかどうか、そういうところで「法」の話、仏様の教えの話に入っていく。そしてそれを本当に実際僧侶が実践できているのかどうか、こういう流れで「仏法僧」の「法」「僧」という形で流れていって、最後「仏」に戻ってまとめをするということになります。

お手元のレジメにもありますように、歴史を勉強する目的とは、過去から現在の流れを見る

ことで現在から未来にどういう方向に社会が進んでいるのかということを理解することにあります。色々あるでしょうけれども、私はそこに挙げております５点がこれからの社会の方向性ということになるだろうと考えています。

まず１番目の「自我の肥大化」、２番目「身体性の欠如」、３番目「死の隠蔽」、それから４番目「物語の喪失」、そして５番目の「多様性の重視」、こういう方向にこれから進んでいくだろう。それに対して仏教はどう応えるのかということを見ていこうと思います。

ではまず本論の１「法」というところから入っていきます。これから社会はどんどん進んでいく先には何があるのか、社会が進んでいくとはどういうことだろうかと考えた時に、私たちの自我（エゴ）はどんどんどんどん膨らんでいく、インフレートしていく、そういう方向に社会は進んでいるのではないかと私は思います。

例えば仏教を理解するキーワードとして「苦」というものがあります。苦しみの「苦」ですけれども、「苦」を克服するのが仏教です。じゃあ「苦」というのは一体どういう構造をしているのか。大体「苦」というのはパターンがあって、どういう構造をしているかといいますと、欲望と現実がずれた時に「苦」というのは必ず起こります。こうしたいのに現実はそうなっていない、これが「苦」です。もっともっと食べたいのに食べ物がない。もっと貯金が増えればいいのに、でも現実はそんなに貯まっていないというふうに、こうしたいっていう欲望とそうなってない現実がずれた時に苦しみというのが起こる。

ではこの苦しみを解決するにはどうしたらいいかと言うと、このズレをなくせばいいですね。ズレの無くし方に二つあって、現実を変えて欲望を満足させるという方向と、欲望を捨てて現実を受け入れる、この二つしかないです。ずれの直し方、例えばダイエットを例に取ると、48kgがいいと思っていても現実は60kgあるとすると、この12kgの差がその人にとっての「苦」ということになります。そうするとこの「苦」をなくすためには、ダイエットして60kgを48kgにすればいい。そうすると、この人の「苦」はなくなります。もう一つは60kgでええやん、48kgに落とさなくても60kgという現実を受け入れればいいじゃないかっていうふうに、単純にいいますと、どっちかなんですね。現実を変えて欲望を満足させるか、欲望を捨てて現実を受け入れるかどっちかです。仏教の場合は当然後者ですね。例えば一番大きな苦しみは死です。これはなんぼ頑張っても現実は変わらない。生まれたものは死ぬんだというのが仏教の大原則ですから、生まれてきているのに死を避ける事は出来ないとするならば、死ぬんだという現実を受け入れて、いつまでも生きていたいという欲望を捨てるしかないのです。

これは宗教と言うか仏教の方向性ですが、今私たちが住んでいる社会というのは、欲望を満足させるために現実をどんどんどんどん変えていっている。ああなったらいいのに、こうなったらいいのにと、欲望を満足させるために現実はどんどんどんどん変えていっています。一番端的なのがスマートフォンやパソコンの類ですね。もっとこんな機能が付いたらいいのに、あんな機能が付いたらいいのにという私たちの欲望を満足させるために、どんどんどんどん機種が新しくなっていくということになりますね。

そうすると宗教と科学というのは相反するようでいて、苦しみをなくすという点では共通してるんです。ただしその無くし方が、宗教の場合は欲望を捨てて現実を受け入れるのに対して、科学は現実を変えて欲望を満足させるという方向に進む。残念ながら社会は、色んな現実を変えて欲望を満足させる方向に進みますから、私達の欲望は膨らむ一方です。どんどんどんどん膨らむ。私たちは当たり前の基準をどこに置くかというと、プラマイゼロに置く。プラマイゼロから発想すると幸せを感じられませんから、もっとこうなったらいいのにということで欲望を満足させるために基準を一つ上げます。上げたはいいけれども、これで人間は満足するかっていうと、しないですね。その状態が１年続いたらどうですか、今度はそれが当たり前になってそれがゼロになるんです。そしたらさらにその自分の欲を満足させようと、さらに高い欲望を起こして、そしてそれを満足させていく。上がった瞬間はいいけれどもそれがまたゼロになるというふうに、私たちの社会というのは、今

こんなふうになってるわけです。だから私達の自我というのはインフレートする。どんどんどんどん大きくなる。

ところが仏教の当たり前の基準はどこかと言うと、ここです。一切皆苦、人生というのは苦なんだと言うところに置くので、何も無い事なんて幸せ以外の何ものでもない。苦を無くそうと思えば簡単なんです。実は当たり前の基準を下げれば下げただけ、全てがありがたいこととして受け取る。けれども残念ながら科学技術が発達することによって、またそれはお金になりますから、私達の欲望を満足させるためにいろいろな商品が次から次から開発されていく。そしてそれを私たちは買い求める。その瞬間は満足するけれども慣れてしまうと、もっと高い刺激を欲するようになる。高い刺激を求めてまた新しい商品が出るというふうに、世の中というのはどんどん自我、私たちのエゴが右肩上がりで上がっていく。そんな社会でいいんでしょうか、ということですね。当然エゴというのは煩悩の一種ですから、それがどんどん大きくなるのは仏教的に言うと非常に都合が悪いことになりますね。そこで仏教の教えがこれから益々必要になるというのはそういうことです。

さっきお釈迦さんの例で言ったように、人間は、いつかは必ず死ぬ。でもいつまでも生きていたいと思う。でもお釈迦さんの場合は、そのいつまでも生きていたいという自我を捨てて、人間は生まれたら死ぬんだというその事実を受け入れられた。つまり自我の否定ですね。相対化と言ってもいいかもしれません。そうすることで苦しみをなくす。そういう方向に仏教は舵を切ってるはずなんだけれども、世の中は残念ながら欲望を満足させるという方向に進んでいく。釈迦に説法ですけれども、自分という存在を絶対視せず相対化していくということで、苦しみに対処していくのが仏教の基本的な姿勢ということになります。そういうことで、自我がインフレートしていく、膨れ上がっていく時代にそういう自分を相対化していく、否定していく必要がある。

自我の否定は無我です。無我を説く仏教の教えはこれから益々重要視されていくのではないかと私は見ています。こういう社会になればなるほど、無我を説く仏教の価値は見直されてくるのではないかと思います。ここで一つ、私が妄想する世界平和の在り方を紹介します。普通私たちは自分というものを中心において、その他のものを周辺に位置づける事によって幸せを感じるようになってます。

個人だけじゃなくて国もそうですね。今、社会世界をみたらどうですか。どこが中心に座ろうとしてます？「俺らが世界の中心だ」という国は、あえて言いませんけどもいくつかある。でもそれをやると、これは椅子取りゲームと一緒で、中心はひとつしかないんですよ。ひとつしかない中心をみんなが奪い合って、私も私もって座ろうとすると、必ず喧嘩が起きる。仏教は無我を説きますから、むしろ我というのは周辺に位置づけられていく。この考えが素晴らしいのは、自我がいくつ増えたって円が大きくなるだけで、喧嘩はおきません。

問題は何を中心に置くかですね。仏教だったら仏とか法を置けばいいんですけれども、なかなか世界全体でこれは承認されません。世界の全ての人が納得できるものを真ん中に置いて、全ての国が周辺に出れば、これが私の妄想する世界平和なんですけれども、なかなか難しいですね。中心に何を据えるか。例えば、自然だったらどうでしょう？ 世界の人の共通認識となるかもしれませんが、とにかくみんなが認められるものを真ん中において、全ての人、全ての国が周りに出て行けば、いくらメンバーが増えたって喧嘩が起こらないということになります。これはまず第一点。

それから次の「身体性の欠如」について考えていきたいと思います。皆さんどうですかね、今日本で暮らしていらっしゃって、ご高齢の方もいらっしゃいますが、30年前と今と比べて何が変わってるでしょうか？ 特にIT技術が進展することによって大きく変わってきたこと、それは身体性がどんどんどんどん失われていく、そういう方向に進んでいませんか？ 例えばバーチャルリアリティ（仮想現実）。最近はMetaverse（メタバース）３次元の仮想空間。頭の中だけで脳の中だけで、全てが処理されるようなそんな社会にどんどんどんどん進んでいます。それから臭いを消す方向に進んでいるで

しょ。消臭です。動物にとって匂いは、ものすごく大事なことなのに、その臭いを消す方向にいく。つまり総じて言えば身体性を消す方向にどんどんどんどんこれからは進むだろうと思います。

なぜかと言うと、養老孟司さんの所論「唯脳論」という考え方によると、人間が進んでいくと脳の働きがどんどんどんどん強くなっていく。それを養老さんは「脳化社会」と呼んでいます。まさしくそうです。もう脳の働きが強くなって、身体というものはどんどん忘れ去られていく、そういう社会に今なりつつある。だからテレビで死体が映ることなんてないでしょ。その身体性の象徴が死体ですけど、死体が映るって事はない。死体が発見されても、ブルーシートで完全に覆ってしまうというふうに、死体は見せないようにする。皆さんも馴染みがある火葬場はどうですか？ あそこで人間の体を焼いているように思います？ 外から見るとホテルみたいですね。というふうに、その死体を焼いている現場でも死を感じさせないような工夫がなされている。それは養老さん的に言うと、その脳化が進んでいるからです。

脳はどういう器官かというと、体中に神経を張り巡らして身体を統御してコントロールする、そういう部署です。ですから死というのは、完全に統御と制御から外れる存在なわけですから、脳にしてみたらそれを見たくないんです。だから死を隠す。身体というのもいつかは腐って無くなって完全にコントロールできないっていうことですから、脳の働きが強まれば強まるほど身体の働きを消すように働くんだという。それが養老さんの「唯脳論」。

これで面白いのは、軍隊とスポーツクラブでは逆に暴力が制度化されるということです。当たり前に殴るじゃないですか。あれだけ問題視されていても、高校のクラブで暴力事件が絶えない。なぜかと言うと、スポーツのクラブと軍隊においては、身体性が欠如したら困るんです。だって身体なしで戦争もできないスポーツもできない。だからそういう身体性を呼び起こすために暴力というのは制度化されているのではないか、常態化してるのではないか。これが養老さんの「唯脳論」。非常に面白いと思います。

それから性と暴力も身体性を象徴するものです。法律で厳しく取り締まりますよね。脳の働きが強くなればなるほど、性あるいは暴力というのに対して規制をかけていきます。

それから、日本ではあまりないかもしれませんが、エンバーミングって聞かれたことありますか？ 死んだ体を生きているように施す技術。これはもともとベトナム戦争で体がぐちゃぐちゃに痛んだ遺体を両親のところへ届けるのがあまりにも酷いということで、科学技術を使って生きているかのように処理をする。そういう技術をエンバーミングと言います。それを戦場で傷んだ体に施すならばともかくも、普通の人にもそれをやるようになった。そうすると臨床心理学者の河合隼雄先生、もうお亡くなりになりましたが、面白いことをおっしゃっていて、せっかく死んでいるのにどうしてそんな生きているような化粧するんだ、そういう言い方をされています。

脳化が進めば進むほど死というものを隠そう隠そうとする。それに対して仏教はどう答えるか。いろんな宗派の方がいらっしゃいますが、いろいろな修行がありますよね。修行というのは体あっての修行ですから、これがこれからの社会の宗教の強みにならないかなと私は思っています。身体性がなくなる方向に行けば行くほど、いやいや身体って大事なんですよ、心と身体全体で人間ですよって主張したいのです。「わかる」と「かわる」、一文字入れ替えるだけなんですけども、どっちかと言うと「わかる」が強調されるんですね。やることが本当に理解できたら、その人の行動が変わる。ところが修行というのは逆で、行動を変えることによってあることを理解していく。

まさしく八正道とか皆さんそれぞれの宗派でやられていることも、まず体に働きかけるそれによって精神のあり方が変わってくるという側面もある。もちろん両方あります。けれども、あまりに心ばかりが強調されると私はひねくれ者ですから、いや身体もありますよと言いたい。まず行動を変えることによって考え方が変わっていくんだと。いろんな宗派でそれぞれの修行がありますけれども、身体性が欠如する方向に進むのであれば、仏教は、もうちょっと修行を

前面に押し出して、身体から入る何か方向を伝えていくということも重要なのではないかと思います。

三点目、「死の隠蔽」。これは身体性の欠如とセットになってますけれども、今度は死を隠蔽する身体性の欠如と合わせて死というものも見ないように不都合なものとして蓋をしていく、そういう方向に世の中どんどん進んでいくはずです。ここで人称別の死ということを考えてみたいと思います。小谷先生が書かれていた本にも、フランスの研究者もこれを説いていたし、養老孟司さんもこれを説いてます。一人称の死、二人称の死、三人称の死。一人称の死は私の死ですから、経験した時にはもういなくなってますので、あんまり意味がない。三人称の死はどこか誰かの死。例えばウクライナで、それはそれで大変ですよ、心はちょっと痛むけれども、私たちにとっては意味を持たない死。一番意味を持つのがこれだって言うんです。二人称の死。つまりあなたの死。もっと言うと、私の大切な人の死。

そこでこの人称別の死をちょっと頭に入れておいてもらって、葬式ということを考えてみたいと思います。当然ここにいらっしゃっている方も、何体かご供養されてきたと思いますけど。この葬式もだんだん簡略化されていますよね。コロナ禍もあって酷くないですか。本当に身内だけで３人とか５人とか、昔だったら40人50人集まっていたお葬式も、密を避ける為ってことで人数も本当に身内だけでいうふうに少なくなってきています。この大会の事務局長をされています長澤上人の『今、先祖観を問う　埋葬の歴史と現代社会』という本も読ませていただきました。ここではですね、直葬とか散骨とか送骨に言及されていて、最近はゆうパックで骨を送るそうです。そんな時代になっていると。全く死というものに重みがなくなってきて、それを養老さん的に言えば、脳化が進んだために死に対しても、それを隠蔽すると言うか、軽く見ると言うか、そういう方向に進んでいるのではないかと言われています。

さあここでちょっと葬式仏教について私見を述べたいと思います。批判的によく言われることもあるんですが、そう批判的に捉える必要もないだろうと私自身は思っています。それはどういうことかというと、仏教というのはもちろん葬式を説くんだけれども、残念ながらそれは仏教の中心思想ではないです。ないんだけれども方便としては極めて優れた儀礼だと私は思います。じゃあ方便って何でしょうか？　これとセットになるのが真実です。嘘も方便と言いますけども、単なる嘘は方便ではない。方便が方便であるためには、必ず真実と繋がっていなければならないということを念頭に置いた時に、葬式仏教と揶揄される場合は二人称の死で終わっちゃってないでしょうか？　どうですか？　ここで終わったら、やっぱり葬式仏教と批判されるんだと私は思う。これは方便、入り口ですから、そこから一人称の死までちゃんと導いているかどうか。これをやらなかったら、ここで切れちゃっていたら、単なる誰かのための葬式。それをやる人は、言葉悪いけども「拝み屋」なんですよ。そういう批判もありますね。

大事な人の死を通して、あなたも死ぬよ、あなたは死ぬまでどう生きるの？　というところに話が行って、初めて葬式は意味を持つ。さっきも言いましたけども、この人称別の死で言うと、二人称の死というのが一番効くんです。残された者には。でもそれの遺体供養で終わってしまえば、それは悪い意味での葬式仏教だと私は思います。さっきの長澤さんの本にも書いてあったけども、お葬式だけして説法しない人が最近いるらしい。一番しみる時なのに。大事な人を失って困っている。そこを入り口として一人称の死まで持っていけるかどうか。持って行かないとしたら、それはやっぱり拝み屋さんでしかないのではないかと思います。

ということで、方便というのは真実が結びついて方便ですから、二人称の死から一人称の死、つまりそれを入口としてあなた自身どう生きるの？　というところまで行けるかどうかがポイントだろうと思います。

それから次の問題に行きましょう。「物語の喪失」これも誰か哲学者の中村雄二郎さんだったかな、知を二つに分けて神話の知と科学の知ということをおっしゃっています。一番最初に科学の事を取り上げましたが、さすがにこれを無視して今の社会は成り立たないと思います。私

だってたくさん科学の知の恩恵にあずかっている。今更、科学の知を否定することはできないし、これはこれで素晴らしい貢献をしている。でもそれが全てだって言われたらちょっと待ってくれと私は言いたい。科学が発達すると、科学で証明されないようなことは、どんどんどんどん否定されていく、そういう方向に進んでいるように私は思います。けれども神話の知を無視して科学の知だけを追い求めていくと、これも私の言葉ですけども、実感として「精神的窒息状態」に陥っていくのではないか。

ひとつかふたつ例を挙げましょう。河合隼雄先生の著書からですけれども、例えば私の大事な人が飛行機事故で亡くなった。ちょっと古いですけど、1985年でしたか、JAL が御巣鷹山に落ちた。私の友人もあれのひとつ前か一つ後ろの便に乗ってるはずだったんですね。本当に間一髪です。もしもそこで命を落とされた方の家族からすると、なんで私の大事な人が１億分の500人の確率であの事故で死ななければならなかったのかと思うでしょ。別に御巣鷹山でなくても、たくさん人が事故にあって私の大事な人だけが死んじゃった。何で？ って残された家族は思います。その時に科学の知は完璧に説明ができる。何で私の大事な人が死んだんですか？ 出血多量ですよ。これで終わりです。納得しますか、遺族の方。なんや出血多量か、そりゃ死ぬわな、とはならんでしょ。そこでやはり神話の知がいる。普遍性はないかもしれないけれども、その人にとって自分の大事な人の死を腹に収める物語がいるんです。

もう一つ例をあげると、私の友人の浄土宗の僧侶ですけれども、あるお寺で住職をされてた。そうすると赤ちゃんが産まれてすぐくらいに亡くなってしまった。お母さんはもう半狂乱です。なんで、なんで、私のこの子が…お葬式してても、もう本当に泣き叫ぶ泣きわめく。もう葬式にならんくらい悲しまれて。そらそうだと思います。私も人の子ですから分かる。でも初七日、二七日、三七日と四十九日の法要をしていくに従って、段々そのお母さんの気持ちが落ち着いてきた。ある時、私の友人にそのお母さんは、「極楽はないと困る。私の子供はそこに往生してないと困る。私も死んだらそこに行けないと困るんや」て言われた。科学的には何も証明できないけれども、まさにそういう不条理なこの世の中で暮らすにあたって、もちろん科学の知も必要ですけれども、得体の知れないそういうものに対して対抗していくためには、神話の知というのも使わざるを得ないと思います。

ここで少し、アニミズムの話もしてみようと思います。アニミズムって聞かれたことありますか？ 万物に魂が宿っているという信仰です。人間だけじゃなくて、例えばこのペンならペン、マスクにはマスクにも命が宿っていると考えるのをアニミズムと言います。私が最初にそれを知った時、そういう客観的な立場からそういう信仰形態をこう名付けているのかなと思ったけど、どうもそうではなく、これはキリスト教神学の中で価値の低い信仰形態、彼らにとったらそのキリスト教神学が一番上で、石や草やペンに命があるなんて下等な信仰とみなします。アニミズムはそういった価値観を含んだ言葉らしいんですけれども、もう１回私はこれを見直す必要があるんじゃないかって思っています。

明日 SDGs の話も出ますけれども、環境の問題が非常に大きなテーマだと思います。全てに命が宿っているんだという視点を視野に入れないといけない。科学の知だけで走っちゃうと、なんかスカスカのカスカスの人生観しか出てこない。普遍性はないかもしれないけれども、アニミズムといったことも視野に入れて考えた時に、私たちの人生が潤ってくるような気がします。

一つ例をあげます。例えば皆さんも子育てをされた経験があると思いますが、子供が人形の手をちぎったり足をちぎったりしたらなんて言います。いや、そんなんしたらお人形さん痛がるで。多分そういう教育をされたと思う。でも科学の知で言ったらどうなります？ いや人形には神経も脳ないんだよ。どんどん千切りなさい。痛くも痒くもないんだよ。どっちで育った子が情緒豊かになるかは一目瞭然だと思います。そんなことで、物にも命が宿っているんだよっていう考え方の方が私は好きな感じがします。

一つ私の先輩のお寺で実際にやられた話。日蓮宗のお寺さんですけども。故人の入れ歯は処理に困るんですって。タンスから出てきたりす

るんですよ、入れ歯。そうしたらさすがに生ゴミと一緒に入れられないでしょう。これは簡単に捨てられません。体の一部として機能してたわけだから。仕方なしにもタンスの中にしまったままにされる。ある人がその和尚さんのとこに行ってなんとかなりませんかなと相談すると、じゃあ供養しましょうということで呼びかけると、まあ集まった。写真見せてもらいましたけども、三方にうず高く入れ歯が積まれて、異様でしたね、白と肌色の塊が乗っかっている。ちゃんと供養して、さようならっていうけじめをつけて「物化」するんですね。まあ物の中の魂だけを抜いて物として、あとは処分する。

この供養という考え方、私は実に日本仏教的な習慣なのではないかと思います。針供養とか人形供養、最近はパソコン供養なんかもある。物にはちゃんと命があって、最後にありがとうっていう気持ちを込めて供養する。それもアニミズムの一種といえば一種です。そういったところに神話の知というものが働き出す一つのきっかけがあるというふうに思います。

じゃあ科学に物語的要素は全然ないかというとそうでもなく、是非これを皆さんに一読して頂きたいんですけども、イスラエルの歴史学者ユヴァル・ノア・ハラリという方がいらっしゃる。『ホモサピエンス全史』という本を書かれていて、これがなかなか博覧強記の書で凄いです。まあ読んでみてください。歴史・宗教・科学いろんなものを用いて人間の歴史をずっと過去から紐解いている。彼に言わすと、虚構つまり物語と神話がキーワードです。

彼にかかると、科学も全部物語になっちゃう。例えば、物理学というのは宇宙の根本を形成する要素の物語である。化学は原子と分子とそれらの相互作用の物語である。生物学は有機体の物語である。というふうに、彼にかかると科学も物語になってしまう。人間は言葉を獲得して想像力を持ち得た。よって伝説・神話・宗教だけでなく国家、国民、人権、平等、自由、これらも虚構なんだ。例えば人生について彼はこう言ってます。純粋な科学的視点から言えば、人生には全く何の意味もない。人類は目的も持たずにやみくもに展開する進化の過程、進化の所産である。人々が自分の人生に認めるいかなるものも単なる妄想にすぎない。人間は意味がないことに耐えられない動物のようです。

解らへんことを延々とさせられたら、発狂するという話も聞いたことがあります。私自身も人生に客観的な意味というものはないと思います。なんか知らんけども、気が付いたらこの世に生まれてきて、なんか知らんけども、ここで私も話をしている。皆様もなんか知らんけどもと言うと失礼ですが、人間として生まれてここに足を運ぶ。客観的な意味はないんだけども、その一方で人間は何か意味がないと自分を納得させられない。だからこそ、私はそういう自分自身を納得させる物語をそれぞれ個人が作っていく必要があるんではないかというふうに思います。

じゃあお前の物語ってなんやと言われそうなので、一応用意してきました。これは変わります。生きてるうちに私も何回か変更は加えてますけども、今私はどんな物語で生きているかというと、仏教の価値をいろんな立場の人々に伝えるために生まれてきた。そのために今仕事をしているというふうに自分の人生を物語と位置づけてその物語に沿って今生きてるつもりです。

皆さんは皆さんでそれぞれお仕事されていく中で私はこれやるために生まれてきたん違うかなということがあると思うんですね。そういう自分の人生の物語をつくる上で、やはりこの神話の知ってのは、欠かせないだろうと思います。仏典なんて物語の宝庫じゃないですか。ということで科学が進めば進むほど、神話の知も私たちは説いていく必要があるのではないかと考えております。

それからもう一つ、これは必ずしもマイナスではないと言うか、おそらくそういう方向に進むだろうというのが多様性（ダイバーシティ）ということです。いろんな人がいろんな価値をもって、そして生きていくという社会になっていきますが、これについても仏教はいろんな話題を提供することができます。いくつか紹介します。

教相判釈って聞かれたことありますかね。教判と略していう場合もあります。けれども仏教の教えは本当にたくさんですから、その中で「一体、じゃ私が信じる教えというのはどれや？」

と自分なりにたくさんある八万四千の法門を価値づけていく。たくさんあるけれども結局私が信ずるのはこれだよということで、皆さんの御祖師さん達も色んな教判を作られたわけです。真言が一番だとか、天台が一番だ、念仏が一番だとか、禅が優れているんだとか、お題目が一番いいんだみたいに教判を作っていく。これは鎌倉時代だけじゃなくて、お釈迦さんが亡くなって200年後ぐらいからもう始まってます。

例えば、実際に経典読むと、お釈迦さんの説法の中に矛盾した言葉が出てくるんです。一切は苦であるとこちらの経典で言ってるのに、別の経典を見たら人生は苦もあり楽もあり、苦でなく楽でないものもあるんだよと言う。どっちが正しいんですかっていうことが、お釈迦さんが死んだ100年200年で問題になっている。仏教徒はどう考えたか。キリスト教だと、どっちかが正しく、どっちかが間違っているっていうふうに完全に白黒はっきりさせるけれども、仏教はそうじゃない。お釈迦さんは意味のないことは絶対言われない。それぞれ絶対に何か意味がある。ややこしいのでA・Bにしましょうか。Aをお釈迦さんが本当に言いたかったことだというふうに位置付けると、Bは特別な意味を込めてそうおっしゃったんだ、というふうに位置づけていくわけです。でもこれはひっくり返る可能性もあります。別の人たちはいやいやBこそがお釈迦さんの直説でAが秘密の意味を込めて説かれた教えなんだ。これも当時のインドからあった。しかし、仏教界としてどっちが正当説か決めないんです。

キリスト教は公会議を開いて白黒はっきりさせる。そして異端の烙印を押されたら消されますが、仏教は横に並んで行くんですね。仏教界としての統一見解は決めない。勿論、喧嘩しますよ。論争はします。論争はするんですけど、統一見解は決めない。ということで、横に並んでいきます。これが私は一つの多様化の始まりではなかったかと考えます。だから鎌倉仏教だって横に並び立つんです。いろんな宗派がありますよ。平安もそうです。皆さんやりますか？「会議開いて白黒決着つけようやないか。浄土宗か浄土真宗かどっちだ」。そんな会議があったら怖いじゃないですか。私は逃げて帰りますけども。そうはしないですよね、お互いに。もちろん自分の信じてる宗派はすごいと思っていても、そう面と向かって相手のことを批判しない。だから横に並んで行く。私の言葉では、仏教は横の宗教でキリスト教は縦の宗教だと理解します。

仏教は元々縁起の教えがありますから、裏によって表がある、表によって裏がある、裏と表どっちが優れているかを決めない。ですから縁起の思想に基づけば、横に並んでいくようになります。

ここで一つ、法界縁起という華厳の素晴らしい教えがあるので紹介しておきます。これはほんと素晴らしい教えで、全てがそのまま一つであり、一つがそのまま全てである、一つが一切の中に入り込んで一切が一つの中に入り込むんだというふうに、もう全てのものが入り組んでいる。一つのものが全てのものに含まれている。そう言うと、個が全体に埋没してしまって個性を発揮しないじゃないかと思われるけれども、逆がある。一切がそのまま一なんですね。一は確かに一切の中に入っているけれども、一切が私の中に入り込んでいるとも言う。共済を考えてください、共済。ちょっとずつお金出しますよ。その時点では私のお金は全体に没収される感じです。でも皆さんが怪我したらどうですか。その全体のお金の一部は帰ってくるというふうに、一が全ての中に入って、全てが一の中に入っていく。

例えば私は野球をやってたから野球の例を出しますけれど、９人集まらないとチームはできません。そういう意味では個人は９の中に入り込みます。でも一番バッターを私は任されたとして、一番バッターがいなかったらどうですか。チームが成り立ちませんよ。だから私は全体に支えられているけれども、私が全体を支えているという側面もあるんですね。ここがこの法界縁起の素晴らしいところ。決してその全体の中に個が没入するんじゃなくって、全体を私が代表しているんだという側面もあるわけです。それに基づいて多様性を考えると面白いかなと思います。

それから多様性について仏教の素晴らしいなと思うところは、曼荼羅です。曼荼羅と言うと、真言宗系あるいは天台の専売特許かもしれませ

ん。けれどもね、まあ真言宗系の曼荼羅だと、中央には大日如来が恐らく来るでしょう。さっきと同じ理屈で浄土教だったらどうですか。智光曼荼羅、観経曼陀羅。今度は阿弥陀仏が真ん中に座って他の仏達菩薩達は周りに配されている。身延山だから、気を遣うわけではないですけども、日蓮宗の大曼荼羅があります。南無妙法蓮華経が真ん中に来て、四大菩薩がいて、諸尊が漢字で配置されています。これはなかなかすごいなと思いました。色んなものが真ん中にくるんですよ。その真ん中にくるものによって、周りが配置されている。それもただ単に配されなくて、見事な景観です、バランスと言うか。そんなところにも多様性を考えるひとつのヒントがあるのではないかと思います。

またこの辺は明日のパネルディスカッションでもテーマになるかもしれませんけれども、私が考える多様性というのは、ただ単に多くのものが併存しているのであれば、それは共存だと私は思います。この今回のテーマになっている共生になると、ただ単に横に並んでいるというのではなくて、並んでいるもの同士が関係を持つ、それも win-win の関係で、シナジーを発揮する。それで初めて共生ですね。共存は共存で難しいですよ。大国同士が戦争しない状態にあるっていうのは、それはそれで素晴らしい。もう一歩進めて言うと、お互いにないところを補い合うとか、あなたがいてくれたからこそ私の国は豊かになる、いやいや、あなたのおかげでうちの国も豊かになっている、みたいな関係が構築できたら、より素晴らしいですね。ただ単に価値観の違う人が住んでいますというだけでなくて、その住んでいる者同士が生かし合っている関係。そういう視点から多様性というものも考えてみたいと私は思います。

ということで、だいぶ時間を喰いましたね。ダルマ「法」に関しては今いったようにこれからの社会を考える上でヒントになる教えもたくさんある。問題は「僧」です。じゃあその立派な素晴らしい教えをちゃんと現代社会に活かせるように私たち自身が努力してるかどうか、ここが問われるんですね。今からちょっと荒唐無稽なこと言いますが、私自身も出家者ですから、自戒の意味も込めて言います。決して上から目線で、「俺はできているけどお前らできていない」そんなんじゃないので勘弁して聞いてください。それから、ちょっと極端なことも言います。例えば、酸性に３傾いているものにいくら０を足しても０に戻らないですよ。アルカリ３足さなきゃなりません。だから、ちょっと極端なこと言うというのもご承知おきください。

まず日本仏教の問題点、一つはその寺請制度ですね、檀家制度と世襲制度、これにメリットもありますよ。安定的に出家者を排出する装置となっている。しかし、残念ながら志のない出家者を輩出する装置にもなり得ている。量という点では優れているけども、資質という点ではこの制度はちょっと問題がある。もう一つは戒律の欠如です。日本仏教は戒律を放棄しちゃった。もちろん大乗戒というのがあって、それはそれでメリットもあるんだけども、いわゆる小乗的な250戒。正確には律というんですけど、それを放棄したためにこうなっちゃってるって言う部分もあります。もう一つ、これは日本仏教の特徴ですけども、教祖信仰。お祖師さんは素晴らしい…素晴らしいんですよ。素晴らしいんだけども、そこで止まってたらあかんでしょっていうことを、今からお話しさせていただきたいと思います。

教祖信仰についてですが、ある方が、律が不在、律を放棄しちゃったというところと根っこが一緒なんじゃないかっていうことで、こんなことをおっしゃっています。律という仏教教団の共通規範を否定する以上、各宗派は独自の仕方で僧侶を養成することになる。そして宗内では求心力を維持するため各祖師のカリスマ性が声高に語られることになる。宗派性の強さや祖師信仰といった一般に日本仏教の特徴とされるものは律の衰退と相関しているのであった。どういうことかというと、小乗仏教だったら250という戒律を皆で守りましょうという共通基盤があった。それを守っているということで、僧侶の僧侶たる資格が担保されていた。ところが日本仏教はそれをガラガラポンしちゃった。そしたら僧侶を養成するのは各宗派に任されるわけです。当然各宗派は自分たちのオリジナリティを出すために、ここの宗派は、この宗祖は、いやいやこの宗祖は、というふうに、宗祖に宗派

のアイデンティティーを求めるようになっちゃう。だからもう宗祖を否定できなくなるんですよ。崇め奉る存在になっている。もちろんその側面もあるけれども、あまりにそれが強すぎて、それを乗り越える努力ができていない。それを今から説明します。

こういったいろいろに問題があるので、それに対してどう対応していくのかということで私見を述べさせていただきます。一番大きいのは、これ（聖性）をどう担保するかということです。聖性、ちょっと聞きなれない言葉ですけれども、松濤誠達という仏教研究者が書いた本によりますと、お釈迦さんは悟ってからも修行してます。なんでかと言うと、聖性を常に獲得して、これを失わないためであったのではないかという事を言ってます。例えばお布施。お布施って何かっていうと、インドでは不浄なものだと見なされていました。それを受け取って何もしなかったら、毒が回るんですよ。その不浄なものを受け取ったら、それを不活性化する、あるいは浄化するために修行が必要だった。つまり修行することによって聖性が担保されて、これがあるがために不浄なものを受け取っても、その不浄に毒されない。

考えてみればそうですよ。お布施っていうのは物惜しみの心とか、こんなにやりたくない、みたいな気持ちが乗っかってくるんですよ。皆さんそれを受け取るわけです。もう不浄の不浄ですよ。これ受け取っておきながら、聖性がなかったら毒回りますよ。私も含めてですけど。お釈迦さんが死ぬまで修行を続けたのは、そういう布施を受けても、その不浄な布施に毒されないために、聖性を担保するために、最後の最後まで修行されたのではないか。やはり、これをもう１回ちゃんと考えんといかんと思います。

そうなると、形式主義に落ちいってもダメなんですが、本当に僧侶が妻帯するっていうことはどうなんだっていうことにも話がいきます。これについては、前にこの会の理事長をされていた戸松さんがですね、ある本の中で自分が若い時にタイのエイズ患者を収容するホスピスにタイのお坊さんと一緒に訪れた時の話を残されています。若い時だったんですけど、タイのお坊さんと一緒に行かれた。そうすると、タイのお坊さんはエイズ患者と握手する、頑張れよと。でも、移るんですよ。戸松さんは、それを見てうっとなった。俺に彼の手は触れない。なんでか。お寺に嫁さんがいる、子供がいる。だからもう本当に心の中で泣いていたというふうに書かれていた。そういう戸松さんに対して、タイの僧侶は何事もなかったかのように「当然ですよ。あなたは守るべき家族がいて守る寺があるのでしょう。でもタイで僧侶として出家したということは、支えてくれる人々に命を捧げたということを意味するのです。だから私には妻も子供もいません」というところから、戸松さんは僧侶の独身主義には意味があったんだというふうに結ばれています。私たちにこれができるかどうか、結婚して妻帯してこれができるかどうか。難しいですね。家族よりも「法」「ダルマ」の方を大事にできるか。大事にした人が一人、日本仏教の中では親鸞さんだと私は思っています。

ジャータカっていうお釈迦さんの過去物語の中に『ヴェサンタラ ジャータカ』というのがあって、お釈迦さんは昔々王様だったった。その王様は請われるままに、あらゆる物を布施するんです。ある人には象をお布施するんです。象は昔の戦力です。それも手放す。子供を手放す。嫁さんも手放す。最後はハッピーエンドで戻ってくるんですけれども。でも決意を試されるわけです。

これができたのは日本仏教の中では親鸞さんかなと思います。結婚して子供が可愛いはずなのに義絶してますね。ダルマを守るために彼は息子と縁を切ったわけです。それができるんだったら、結婚してても聖性は保たれるだろうと思います。それだけの気概根性が我々にあるのかと考えると、妻帯して子供を持つと、「ダルマ」に全てを捧げるって事にはなれないのかなと思ったりもします。

家族を持たず「ダルマ」に全てを捧げるような状態になるのが望ましいのでしょうが、これだけ寺檀制度や世襲制度が根付いてますから、いきなりそういう社会にはならないので、その間をどう埋めていくかということは問題です。私も田舎のお寺の出身ですけども、家族制度が崩壊して、田舎で仕事がないからみんな都会に

出て行く、もう檀家制度は崩壊してますよ、田舎は。うちの田舎もそうです。そういうのを見た時に、なんぼ努力したって経済的に食べていけない寺がある一方で、都会のある一部の裕福な寺は、そんなに努力しなくてもちゃんと経済的な余裕が生まれていく。この不平等どうするか、教団としてどう考えるかっていうことですね。

これも荒唐無稽な提案ですけども、どこかの段階で財産を宗派の共有財産にできないだろうか。そしてお坊さんの派遣とか指名も全部本山がやる。独身であれば、そんなにお金要らないじゃないですか。ただ、お寺を維持したり修繕したりするのにお金は要ります。それはそれでお葬式なり何なりして収入を得る。でもそれは個人の財産にしない、みたいな方向に徐々に移行したらどうでしょうか。日本以外ではやっているはずじゃないですか。檀家制度ないわけでしょ。私は専門じゃないけども、タイとかそういうところで実際にどんなふうにそういう経済的なものを獲得されているのかというとちょっと勉強をする必要があるのかなと思いますし、葬式法事だけに頼らない収入の獲得、それも個人の所有にしないのであれば一定の理解を得られるのではないかと思います。これはなかなか難しい問題ですけれども、とにかく聖性を何とか担保する。

世襲制度・檀家制度を維持せよというんだったら、それを上回る聖性をどう担保していくのかいうことを考えないと、もう日本の宗派は危ないのではないかと思ったりもします。

はいそれで本論の３に入ります。そういうことを踏まえて、じゃあ最後の「仏」。「仏」と言ってもね、「私が仏だ」っていう人は怪しいですから、ここでの「仏」はどういう人かというと、僧団のリーダー的あるいはまあ指導者的な存在になる人のことで、そのような人が、そこから出るかどうか。これについては、さっき教祖信仰のことを言いましたけども、我々の教祖も当時は異端者だったことを知るべきだと思います。当時の伝統教団に非を唱えてきた人ですよ。鎌倉仏教、まあ平安もそうだと思いますけども。そこを無視して、私たちは新興宗教を批判しますけれども、それはおかしいんじゃないか。臨済義玄の有名な言葉に「仏に逢うては仏を殺せ、師に逢うては師を殺せ」というのがあります。これはけしからんやつだから殺せじゃなくって、乗り越えるということですね。だからやっぱり日本の宗派も、さっき言ったように律の不在によって、教祖というものに対する絶対的な信仰みたいなものがあるけども、そこで終わっていたら仏教は死滅するんじゃないかと。

仏教に原理主義はないんですよ。原理主義というのは聖書に書いてあることは絶対であり、経典に書いてあることは絶対だと考える。そこから１ミリも動かせない。でも考えてみてください、私達が信仰する仏教の大元に遡れば、それはお釈迦さんですけども、我々の宗派の源である大乗仏教なんてお釈迦さん説いてないですよ。あれはお釈迦さんが亡くなったあとお釈迦さんが言いたかったことは、こういうことなんやということでできた宗教です。そこで脱皮しているんですよ一回。さらにまた鎌倉のお祖々さん達は、いやいや私が考える大乗仏教はこれであると、もう１回脱皮させてるわけです。お釈迦さんの教えに念仏の教えなんてないですよ。題目もないですよ。でもお祖師さん達は過去の文献を頼りに、今必要とする仏教は何かということで過去の教えを否定したんじゃなく、蘇らせ、新しく再生させたんですね。それがどうも鎌倉時代で止まっているように私には見えてしょうがない。それをもう１回新しく更新していくという努力は、私たちにできているかどうか。

私は浄土宗ですから法然上人の教えというのは今現代の問題にどう対応できるんや。どう答えうるんや。もう１回脱皮させていく。そういうことが必要なのではないかと。仏教というのは脱皮の歴史を繰り返して今日まで生き延びてるわけですから、それを鎌倉時代止めてしまったら、私たちは本当にＡ級戦犯になるかもしれない。もう１回そこを脱皮させていく必要があるのかなと思います。

異端というと、森本あんりさんという方が『異端の時代』という中でこんなことを書いてらっしゃる。なかなか面白いんです。現在の正統を襲って、これになり変わろうとする異端、時満ちなば必ずや正統たらんとする異端、自ら新たな正統を担おうとする覚悟のある異端だけが真

の異端たり得る。もしも現代に正統の復権があるとすれば、それは次の世代の正統を担おうとする。このような正真正銘の異端が現れることから始まる以外にはないと彼は言います。まさしく私は鎌倉時代がそうだったんだと思います。当時の伝統教団に対して各お祖師さん達は、新しい教えを唱えていった異端ですよ。もう日蓮さんは特にそうじゃないですか、迫害されて。

でも異端もね、嘘の異端と本当の異端がありまして、嘘の異端はただ単に正統に文句を言ってるだけで、じゃあおまえどうやるんや？ お前の意見は？ と問われると、答えられないのが嘘の異端。正真正銘の異端というのはもういつかは正統に成り代わってやるんだ、それぐらい気概のある異端が正真正銘の異端。だから今正統になってるわけです。でももう一歩進んで言うと、そこからまた新たな異端が出てこないといけない。そして今の正統を打ち破っていかないといけない。こういう正統異端正統のサイクルがうまく回って世の中というのは進展していくんだというのが、森本あんりさんの主張ですね。ですから私たちも鎌倉時代で止めるんじゃなくって、そこからもう１回異端児が現れて今のお祖師さん達の教えを更新していく、そういうことが必要なのではないかと思います。

では結論です。「仏法僧」のうち仏教を変える原動力となるのはやはり私は「僧」だと思います。「僧」が「法」を新たに解釈するし、「僧」が「仏」を新たに創出する母体となるとするならば、やはり「仏法僧」の「僧」の持つ役割というのは大きい。でここで少し違った視点からこれを言うと、「福田」ということです。サンガというのは福田である。福田というのは何かというと、そこに種をまけばそこから芽が生える。そういう存在に私たちはなり得ているのかどうか。カラカラのアスファルトになってないだろうか。種をまいても何も生えないというのでは困るわけで、そこにお布施をすれば、そこに種をまけば、必ず何か芽が出て、その収穫が得られるというのが福田です。

水野弘元という仏教学者は福田を三つの視点から分析しています。１番目は仏教の専門家。２番目は信仰の指導者。３番目は正法の所属者。理論と実践を兼ね備えているかどうか、それから信仰の指導者という意味では、これですね、聖性をちゃんと確保できているかどうか。それから法をちゃんと次の世代に継承していくことができているかどうか。さっきも言いましたが、法よりも家族の方が大事になっていたのでは、なかなかそれができないということになります。

それからもう一つ、最後にこれで終わりますけれども、寺檀家度がある程度崩壊している今において、檀家の人だけに法を説く時代はもう終わったと思ってます。全ての人に対して法を説けるかどうか。浄土宗のこと言いますね。私も浄土宗の人に阿弥陀仏や極楽の話をするのは簡単なんですよ。説明しなくていいから。でも浄土宗を信仰していない人に阿弥陀仏といっても、阿弥陀仏ってそんなんいるんですか、浄土って本当にあるんですかって言われた時に、ちゃんと私達は答えられるだろうか。檀家の人だけを相手にする時代はもう終わったと思ってます。ですから皆さんも、皆さんが信じていらっしゃる宗教を檀家の方以外に普遍的に普遍性を持たせて説けるかどうか、こんなに魅力的なんだよと説けるかどうか、それが問われているのではないかと思います。

すいません、ちょっと時間がオーバーしたかもしれませんが、本当に思う事をベラベラと勝手気ままに喋ってしまいました。お叱りはいつでも受けますので文句を言ってください。どうも御静聴ありがとうございました。

身延山現代音楽法要

『オラトリオ日蓮聖人』

『オラトリオ日蓮聖人』は、日蓮聖人第七百遠忌（昭和56年）記念事業の一つとして制作されました。作曲は、当時「涅槃交響曲」等を発表し仏教に深い関心を寄せておられた黛敏郎氏にお願いし、作詞は日蓮聖人を深く讃仰敬慕されていた詩人の西川満氏に依頼しました。

第46回 全日本仏教徒会議 山梨・身延山大会における身延山現代音楽法要では『オラトリオ日蓮聖人』から要所を抜き出し、初めて法要形式にまとめました。これは、身延山や日蓮聖人を知っていただきたいという思いから、誕生・禅定・入滅を法要に組み入れたものです。

この法要は通常の日蓮宗の法要式とは異なります。
宗派を超えて全日本仏教徒会議にご参加下さいました皆様とともに、現代音楽を通して「共生共栄」を目標により良い日本の将来を考えていきたいと思います。

パネルディスカッション

「だれも取り残さない社会の実現に向けて」

コーディネーター兼調査報告

小谷みどり 氏

シニア生活文化研究所代表理事
身延山大学客員教授

プロフィール
大阪府出身。
シニア生活文化研究所代表理事、専門は死生学、生活設計論。
最近の主な著書に、『ひとり終活』（小学館新書）、『ひとり死」時代のお葬式とお墓』（岩波新書）、『没イチ』（新潮社）など。

問題提起「山梨県内寺院における SDGs 調査報告を受けて」

パネルディスカッションに移りたいと思います。ディスカッションのテーマは誰も取り残さない社会の実現に向けてです。本日コーディネーターを務めて頂きますのはシニア生活文化研究所代表理事で身延山大学客員教授の小谷みどり様です。それでは小谷先生にご登壇を頂きます。皆様拍手でお迎えください。

それではここで小谷みどり先生のプロフィールをご紹介させていただきます。小谷先生は大阪府のご出身で専門は死生学、生活設計論でございます。本日は小谷先生より山梨県内の寺院を対象とした SDGs 意識調査アンケートから得られた結果をご報告頂き、その結果をもとにパネラーの皆様にご討論いただきたいと思います。それではまず小谷先生から調査報告、問題提起をお願いいたします。

ご紹介にあずかりました身延山大学客員教授小谷と申します。今回のテーマは「SDGs と仏教」です。山梨県内の各寺院に山梨県仏教会が調査された結果を私が分析しましたので結果を報告します。

まず調査は、今年の５月に山梨県内の寺院841ヶ寺に郵送あるいは、ネットでおこなわれました。回収率はネット回答が58通、郵送回答が226通で回収率が33.8％です。一般的な調査ですと回収率３割は普通ですが、全日本仏教会のシンポジウムで向けてのアンケート依頼にも関わらず、県内の御寺院の３割しか協力をしないっていうのはどういうことでしょうか。

テーマが SDGs なので、回答しなかった７割の僧侶は、そもそも SDGs に関心がない方が多いのではないかと思われます。回答された３割の結果をもとに、今からいくつかの図表を示ししたいと思います。属性は、60代70代の方達が

半分以上を占めています。圧倒的に男性が多くなっています。驚くのは、SDGs を知ってるかという項目です。

聞いたことあるけど内容知らない、そしてSDGs って言葉を聞いたこともないを合わせますと３割の僧侶は SDGs を知らないと回答しています。

年齢で見ると、70代60代、特に80代では、半分近くの方が SDGs なんじゃそれっていう結果です。概ね60代以上になると SDGs を知らない人が増えます。仏教と SDGs というのは馴染みがないと主張されるお坊さんもいらっしゃるかもしれませんが、そもそも SDGs がなんだかよく知らないっていうのは、世の中の情報にとても疎いというか、毎日のように新聞やテレビで SDGs という言葉が出ているのに聞いたことがないのは、SDGs に関わらず、世の中の話題に関心を持っていないことの一つの表れではないかと思われます。

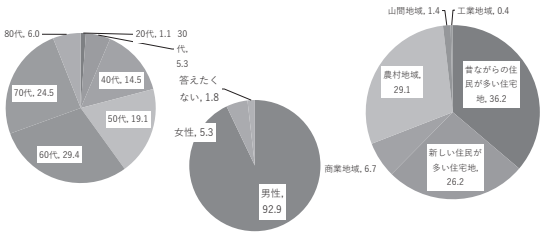
SDGs 項目で関心がある分野を５つまで選んでいただいてるんですけども、一番多いのが「貧困をなくそう」ですが、回答率が４割にとどまっています。僧侶の皆さんの関心分野が分散しているといえます。年齢で見ると、20代の人たちはいろんなことに関心を持ってる方が多いです。一方、40代ですと「貧困を無くそう」とか、「全ての人に福祉を」「続けられる街づくりを」という項目がまあ多いのですが、回答率は３割です。70代80代ですと半分近くの人たちは「すべての人に健康と福祉を」という分野に関心を持っています。また30代の方達は半分以上の人たちが「貧困をなくそう」という項目に関心を持っているなど、年代によっても違うことが分かりました。

環境問題に関わる例えば食料問題とかゴミ問題とかそういう問題に関して日常生活でどう行動しているかについては、一番多いのは「見ていないテレビは消す」で68.9％です。これは多いと思われますか、少ないと思われますか？ 見ていないテレビを消すと答えた人は68％いる。３人に１人の坊さんは見てないテレビをつけっぱなしにしてるっていう事ですね。それから会食では食べ残しをしないよう気をつける人は68％です。昨夜の懇親会の後、各テーブルを拝見させていただきましたけど、皆さん食べ残し

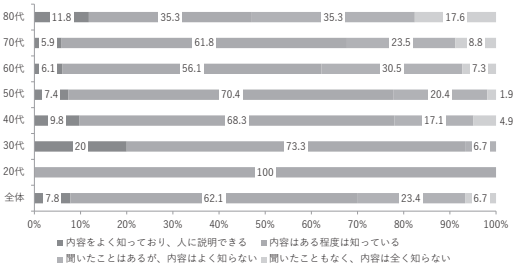
調査概要

調査時期	2022年5月
調査対象	山梨県内の寺院841か寺
回収数	ネット回答　58通
	郵送回答　226通
回収率	33.8％

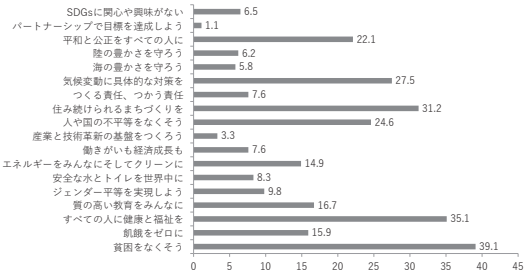
属性



SDGsを知っているか



関心のある分野（３つまで）



がいっぱいありました。食べきれないほどの量を出す方が悪いんだっていうのはあるかもしれませんが、次回以降、僧侶の懇親会では、食べきれない量を出さないようとお店に事前に指示をされるなど、そういう身近なところから意識改革ができるのではないでしょうか。「マイバッグを持ち歩く」が64%、「歯磨きやシャワーの水をこまめに止める」にいたっては半分ぐらいしかやっていません。こうした行動は、僧侶である前に、どうよっていう話ではないかと思います。

これは山梨県内の僧侶の調査ですが、全国的に見ると山梨県は一人当たりのごみの排出量がワースト３位です。一人一人の意識を変えていくことがいかに大事なのかなという感じがしています。

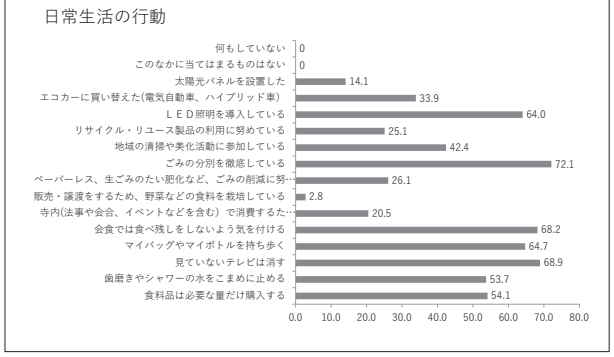
次に、僧侶がどういう活動をしてるのかをみていきますが、どの項目も回答率がものすごく低いです。一番高いのは「選挙には必ず投票する」で、二番目に多い「災害救援や被災地支援に寄付をしている」が４割ぐらいですが、あとはほとんど何もやってないという感じです。

お寺としての空間を使ってどういうことをやっているのかについても、一番多いのは「何もしてない」という回答で、28%です。次に多いのが「お困りごと相談」で、４ヶ寺に１ヶ寺ぐらい行っているってイメージですかね。「仏教の勉強会」で２割、「災害時の避難所としての準備」も２割。ビハーラ活動とかフリーマーケットとかこどもクラブとか子供向け学習支援とか育児支援とかその貧困支援とかその地域の活性化など、こうした活動はしていないお寺がほとんどです。あえていえば、お寺をイベントに貸し出す方は２割弱ぐらいいるかなという感じです。

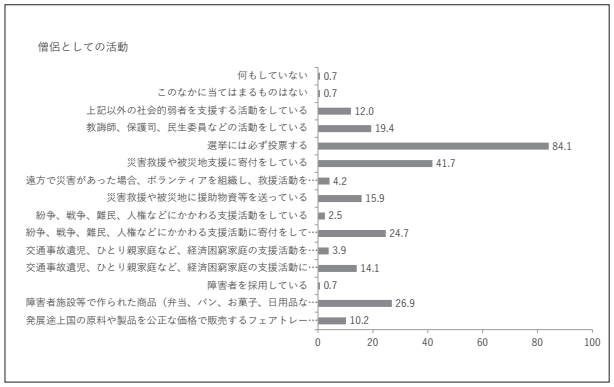
ですから僧侶として活動もしていないし、お寺の空間の活用もしていない寺院がとても多いということです。さらに年齢で見ると、50代も70代も、「何もしていない」っていうのがトップにきます。40代や60代で一番多いのは、「お困りごと相談」、80代は「仏教の勉強会」です。20代だと季節の催しをしている人が一番多い。年代によって少し違うってことありますけれども、総じて何もしてないというお坊さんが多い。

他宗や他宗教、仏教以外の宗教との連携については、全体として「していない」寺院が7割

	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
1位	住み続けられるまちづくりを	貧困をなくそう	貧困をなくそう	すべての人に健康と福祉を	貧困をなくそう	すべての人に健康と福祉を	全ての人に健康と福祉を
	66.7	53.3	すべての人に健康と福祉を 住み続けられるまちづくりを	40.7	41.3	45.5	46.7
			34.1				
2位	貧困をなくそう	人や国の不平等をなくそう		貧困をなくそう	気候変動に具体的な対策を	貧困をなくそう	住み続けられるまちづくりを
	飢餓をゼロに	住み続けられるまちづくりを		37.0	31.3	40.9	40.0
	質の高い教育をみんなに	33.3					
	ジェンダー平等を実現しよう						
	人や国の不平等をなくそう						
	住み続けられるまちづくりをつくる責任、つかう責任						
	33.3						



	全体	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
1 位	ごみの分別を徹底している	マイバッグやマイボトルを持ち歩く	マイバッグやマイボトルを持ち歩く	マイバッグやマイボトルを持ち歩く	見ていないテレビは消す	ごみの分別を徹底している	ごみの分別を徹底している	会食では食べ残しをしないよう気を付ける
	72.1	会食では食べ残しをしないよう気を付ける	ごみの分別を徹底している	会食では食べ残しをしないよう気を付ける	74.1	73.5	85.5	70.6
		100.0	86.7	75.6				
2位	見ていないテレビは消す	食料品は必要な量だけ購入する	見ていないテレビは消す	見ていないテレビは消す	会食では食べ残しをしないよう気を付ける	見ていないテレビは消す	ＬＥＤ照明を導入している	見ていないテレビは消す
	68.9	歯磨きやシャワーの水はこまめに止める	会食では食べ残しをしないよう気を付ける	70.7	72.2	67.5	72.5	ＬＥＤ照明を導入している
		見ていないテレビは消す	80.0					64.7
		66.7						



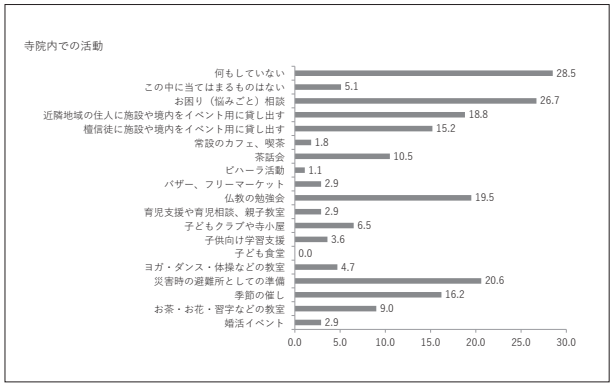
もあります。他宗、他宗教など仏教以外の宗派と繋がりがあるお寺は圧倒的に少ない。私は、他宗との連携や他宗教との連携が必要なのかどうかは分かりませんが、「これまでもしてないし、これからも必要を感じない」というお寺が多いという点だけお話しさせていただきたいと思います。

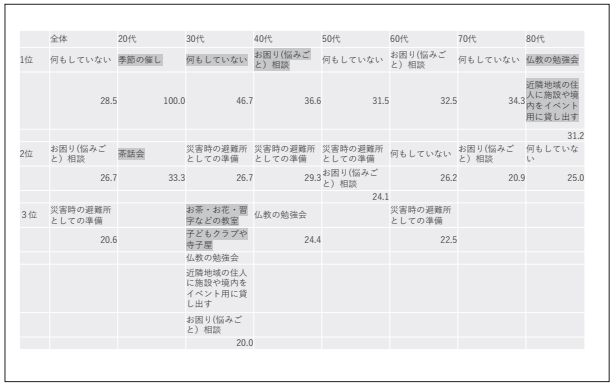
お寺のバリアフリーについては、一番多いのは「段差や階段があるところに手すりをつけている」という回答ですが、「何もしていない」が全体の23%あります。山間地域のお寺では、「何もしていない」という回答が増えます。ご住職がお寺の中で移動がスムーズにできるかという住職の年齢の問題と、バリアフリーの工事をするお金がお寺にあるかという二つの問題がかかってきますので、分析結果だけをお話させていただきます。

僧侶がどんな社会問題に関心を持っているのかをみると、一番多いのが「気候変動問題」です。それから過疎化とか、少子化高齢化といった一般的に今の社会問題だとされている問題に関心が高い傾向にあります。これだけ気候変動に関心を持っている方が多いにも関わらず、先ほどのデータでは、具体的に日常では何の行動もしていないお坊さんが多いのが実態です。

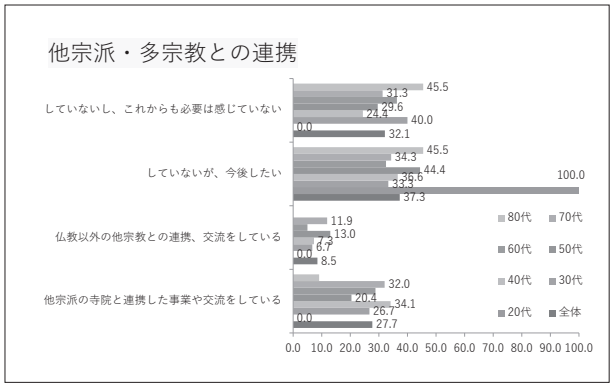
一方、地域住民と交流しているとか、地域の活性化に貢献しているかどうかについて、とても貢献しているが10点。全く貢献していないが１点で、自分採点していただいたところ、平均が5.5点です。これを回答されたお坊さんは謙虚なのか本当に貢献されていないのか、ちょっと私にはよく分かりませんけど、やってるやってるっていうお坊さんは少ない結果が出ています。檀信徒とコミュニケーションをとっていれば、地域住民と交流しなくてもいいんじゃないのかっていう考え方があるかもしれないので。次に檀信徒とコミュニケーションをどのくらいとっているのかをみると、平均点が6.5点なので、地域住民との交流よりは上がっています。しかしものすごくコミュニケーションがとれていると自認している僧侶と取れてないと思っている僧侶が二極化しています。

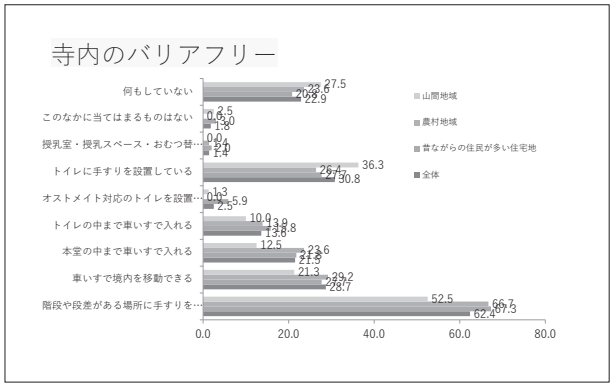
地域の特性で檀信徒とのコミュニケーション度合いを見ると、自坊が昔ながらの住民が多い





	全体	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
1位	何もしていない	季節の催し	何もしていない	お困り(悩みごと）相談	何もしていない	お困り(悩みごと）相談	何もしていない	仏教の勉強会
	28.5	100.0	46.7	36.6	31.5	32.5	34.3	近隣地域の住人に施設や境内をイベント用に貸し出す 31.2
2位	お困り(悩みごと）相談	茶話会	災害時の避難所としての準備	災害時の避難所としての準備	災害時の避難所としての準備	何もしていない	お困り(悩みごと）相談	何もしていない
	26.7	33.3	26.7	29.3	お困り(悩みごと）相談 24.1	26.2	20.9	25.0
3位	災害時の避難所としての準備		お茶・お花・習字などの教室	仏教の勉強会		災害時の避難所としての準備		
	20.6		子どもクラブや寺子屋	24.4		22.5		
			仏教の勉強会					
			近隣地域の住人に施設や境内をイベント用に貸し出す					
			お困り(悩みごと）相談 20.0					

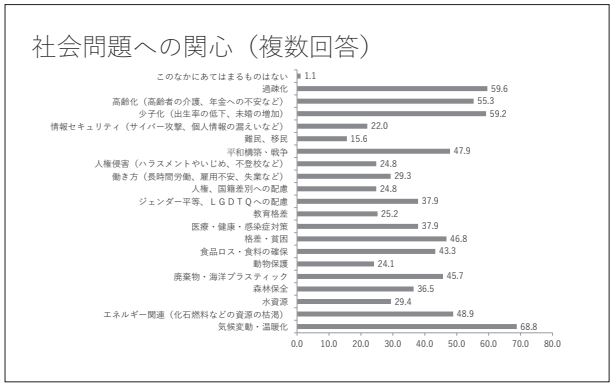


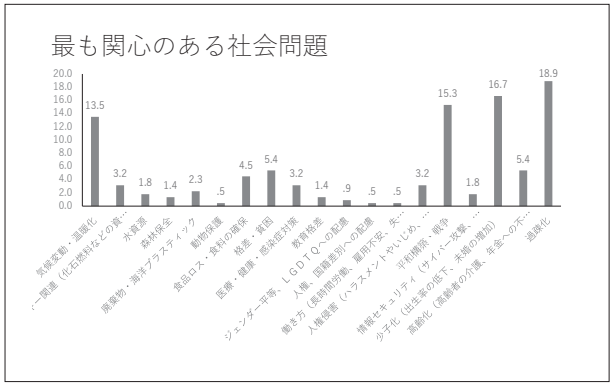


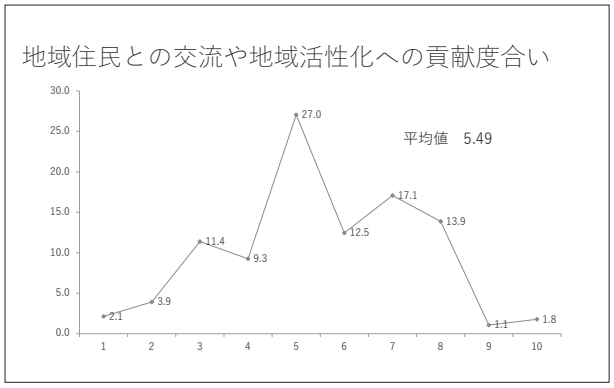
地域の僧侶ですと、檀信徒とコミュニケーションとれている平均が5.5点、新しい住民が多い住宅地だと昔ながらの住宅地よりは下がりますが、一番低いのが商業地域です。商業地域に位置するお寺さんは檀信徒とのコミュニケーション度合いが一番低いのです。それ以外の地域では例えば農村地域であっても山間地域であっても工業地域であっても、それほど差はありません。先ほども申し上げたように、僧侶が一番関心をお持ちなのが過疎化の問題。地域の人口変動とその地域のコミュニケーションの度合いを見ると、人口が増えている地域でも、人口が減っている地域でも、檀信徒と密接なコミュニケーションができている度合いは変わりません。つまり地域特性の問題ではないということです。僧侶のやる気の問題なんですね。檀信徒以外の地域の人たちとの交流とか地域活性化への貢献ができている僧侶は、人口が増えてるところの方が少なくなっています。人口が減ってるところ。あるいはほとんど変わっていないところの方が、地域住民との交流や地域活性化に貢献していると自認する僧侶が多い。人口が増えれば、僧侶が出て行くチャンスはたくさんあるのに、地域住民と交流していないということなんですね。意識、関心はあるけれども実際に行動している僧侶は非常に少ない。

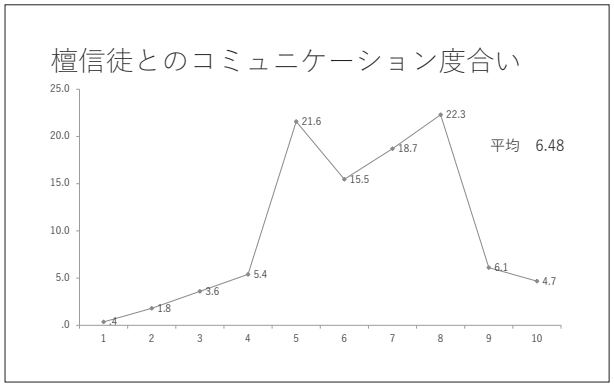
どうしたら行動に結びつくかを考えてみました。例えば先ほど食べ残しをしないとか、見てないテレビは消すとか水出しっぱなしにしないとか、日常生活から環境問題を考えようという意識が、僧侶はとても低いと申し上げました。ところが、社会問題の中で廃棄物とか海洋プラスチック製から食品ロスの問題などに関心があると回答した僧侶は、例えば食料品を必要な量だけ購入するとか、食べ残しはしないようにするとか、ペーパーレスを心がけるとか、日常的な自分の生活の中から食料ロスの問題とかゴミを減らしましょうという問題に何らかのアクションをしていることが明らかになりました。

つまり関心があるから行動する。関心がない人は「しましょう」って言われてもしないのではないかということが考えられます。例えばお供物の消費方法についても、食品ロスや食料問題に関心があると回答した僧侶は、ひとり親世帯









とか困窮家庭に余ったお供物を寄付しているお寺が多い傾向がみられます。関心を持つことがいかに大事かっていうことがいえると思います。

それからお寺での活動と地域貢献については、先ほど見ていただいたように３割近くのお寺は何もしてないと回答しましたが、お寺を活用していないところは、地域住民との交流や地域活性の貢献度が統計的にも低いことも分かりました。

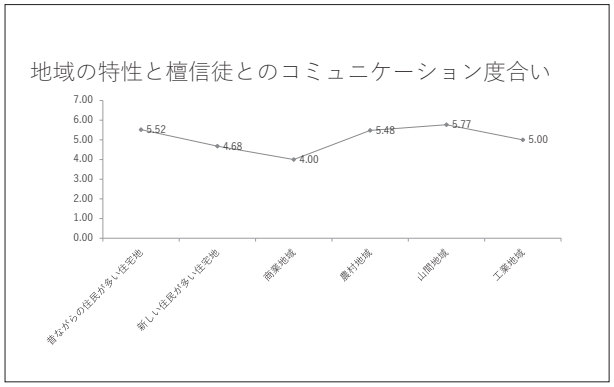
例えば何もしていないお寺は地域住民との交流度合いの平均点は4.9ですが、何かをしているお寺は5.7。統計上はとても差があるという結果が出ています。当たり前の話ですが、何かアクションを起こすことで、地域の方や檀信徒の方達と接点を持つことができるわけで、その人との関わりの中で交流や地域の活性化に寄与することができるということなのではないかなと思います。

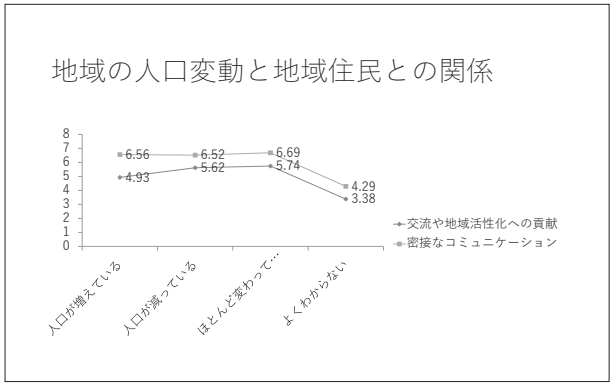
例えば「バザー、フリーマーケット」とか「檀信徒に施設や境内を貸し出している」「近隣の住人に貸し出している」「お困りごと相談をしている」「災害時の避難所としての準備をしている」と回答した僧侶も、地域住民との交流や地域活性化への貢献度が有意に高い結果が出ています。

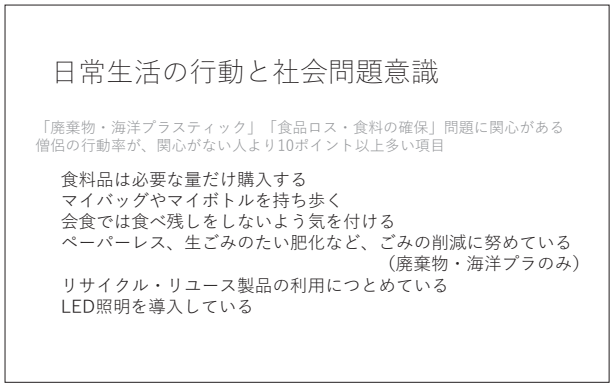
有事の時にはお寺が開放されているということをアピールできているお寺では、地域住民との交流や地域貢献度の認識がとても高いということです。

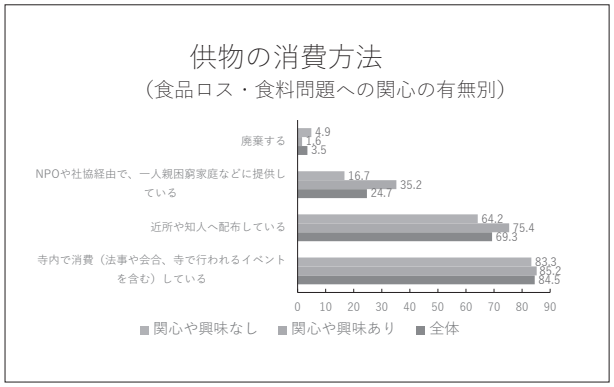
社会問題の中で僧侶が一番関心を持っているのは「過疎化」であることは何度も申し上げましたが、全体で見ると、複数回答にも関わらず、「ジェンダー平等」や「LGBTQ への配慮」に関心があると答えた人は１割もいません。これにはびっくりしました。例えば、私の周りの僧侶のなかには、「そもそも日蓮宗は昔から男女平等だ」と言い切る方も少なくなりません。私は外から見ていて、僧侶の業界が男女平等であると思えないのですが、こうした意識のギャップってどこからくるのでしょうか。

関心がないということと自分たちの業界はジェンダー平等であるっていうことは、別だと思います。僧侶がなぜ関心を持たないのかってことも不思議です。あとで問題提起としてあげさせていただきたいと思いますけれども。「ジェンダー平等」とか「LGBTQ への配慮」に関心が









あると回答した僧侶は、地域住民との交流や地域活性化への貢献度が高いことが分析結果から明らかになっています。

過疎化の問題への関心の有無で比較してもそんなに差はありませんが、ジェンダー問題への関心で比較すると、地域住民との交流をやっていると回答した僧侶の割合にとても大きな差が出ています。昨日内野猊下は、「サイレントマジョリティの声を聞くことが大事だ」とご発言をされましたが、僧侶が行動しない、アクションをしない、関心も低い、そんな状況で、サイレントマジョリティがどこにいるのか、サイレントマジョリティの人がどんな問題を抱えてるのか、分かるはずがありません。

問題がないと思っていることが問題ではないだろうかと私は思います。ではどんな人が地域貢献をしていると自認しているのかを見ていきたいと思います。

例えば災害救援とか被災地支援に寄付をしている方は、自分は地域貢献をしていると回答している人が多くなっています。そしてお困り相談をお寺でしている方も地域貢献をしていると感じている。地域の清掃や美化活動に参加しているという方も、自分は地域貢献をしていると考えています。年齢で見ますと、60代の方はやってるやってるって言う方がとても多いのですが、70代80代では、やってますという方がとても少なくなっています。

最後になりますが、この全日仏の大会に向けてのアンケートに協力をした僧侶が1/3しかいないことにまずびっくりしたこと、ジェンダー問題や人権問題に関心を持っている僧侶が少ないことも、寺の外にいる人間からするとびっくりしました。それから僧侶はほとんど何にもやってない。このシンポジウムの副タイトルは「誰も取り残さない社会の実現に向けて」というタイトルですが、私はこの分析をさせて頂いて、僧侶が社会から取り残されているのではないかと思いました。「取り残されている僧侶を取り残さない宗門の在り方について」っていう副題に変えた方がいいんじゃないかというぐらいです。僧侶が社会から取り残されているということを自覚していただきたいです。ご清聴をありがとうございます。

寺での活動と地域貢献

何もしていない僧侶は、地域住民との交流や地域活性化への貢献度が有意に低い(<.001)

	平均値	度数
何もしていない	4.89	79
何かしている	5.73	202

「バザー、フリーマーケット」「檀信徒に施設や境内をイベント用に貸し出す」「近隣地域の住人に施設や境内をイベント用に貸し出す」「お困り（悩み事）相談」「災害時の避難所としての準備」をしている僧侶は、地域住民との交流や地域活性化への貢献度が有意に高い（<.01）

社会問題と地域貢献

社会問題のうち、「ジェンダー平等、LGBTQへの配慮」に関心がある僧侶は、地域住民との交流や地域活性化への貢献度が有意に高い。（<.001）

	平均値	度数
関心なし	5.25	210
関心あり	6.21	71

どんな人が、地域貢献を自認しているのか

○災害救援や被災地支援に寄付をしている人が多い（平均点以上の人の52.5%＞平均点未満の37.0%）

○お困り（悩み事）相談をしている人が多い（平均点以上の人の45.8%＞平均点未満の27.8%）

○地域の清掃や美化活動に参加している人が多い（平均点以上の人の56.9%＞平均点未満の29.8%）

○60代では55.4%が地域貢献をしていると自認が、70代（36.8%）、80代（37.5%）では低調。

小谷先生ありがとうございました。続きまして本日パネラーを務めていただきます皆様をご紹介しただいま問題提起を頂きました議題について意見を頂戴したいと存じます。はじめに内藤麻里子様でございます。内藤様は慶應大学法学部法律学科を御卒業後87年に毎日新聞社に入社し、学芸部文芸を担当し名物記者として活躍をされました。編集委員を務め19年７月に退社し、現在は文芸ジャーナリスト、書評家として活動されております。それでは内藤麻里子様にご登壇を頂きます。皆様拍手でお迎えください。

パネラー

内藤麻里子 氏

文芸ジャーナリスト
元毎日新聞記者

プロフィール
長野県出身。
慶応大学法学部法律学科卒。
87年に毎日新聞社に入社し、宇都宮支局などを経て92年から学芸部。2000年から文芸を担当し、名物記者として活躍する。編集委員を務め、19年7月に退社。
現在は文芸ジャーナリスト、書評家として活動する。
毎日新聞のコラム「エンタメ小説今月の推し！」、東京新聞・中日新聞「推し時代小説」などを連載中。

ご紹介に預かりました内藤でございます。私は小谷さんの発表を伺っていて、あなたはSDGsを知っていますかという質問を見て、認識することと自分の認識を疑うということを考えました。例えばSDGsを知っていますかという質問の答えは20代の方は内容はある程度は知っている、よく知っている人も含めて100%ですね。これ素晴らしいと思ったんですが、他の世代もそれなりに世間一般より若干いいくらいに知っているとおっしゃっていますね。ただし本当にこれは知っていると言えるのだろうかと思いました。というのは日常生活ですとかいろいろな行動、問題意識の説明を聞いていますと、あまり捗々しいことをなさっていらっしゃらないなと思いますので、やはり自分の認識を疑えということを考えます。

私たちは物事を判断する時に自分の認識でしか判断できないわけですよね。その場合に、自分の認識を疑った方が良いということなんです。実は私自分の認識を疑うことが最近ありました。私は先ほど文芸ジャーナリストと紹介されましたけれど、例えば小説とかノンフィクションについて面白い本を見つけ出してそれを書評するという仕事をしてるんです。つい最近ノンフィクションの本を書評しなければならなくて面白い本はないか探していたんですね。そうしたら作家の平野啓一郎さんが書いた『死刑について』という本があったので読んでみたんです。私は死刑についてきちんと考えたことはなくて、なんとなく死刑は賛成だと思っていました。つまり亡くなってしまった被害者に対する同情、被害者や家族に対する同情とか罪を犯した犯人への怒りとかがあり、特に大量に何人も殺傷した犯人に対しては人間として救いようがないんじゃないかなと思っていました。津久井やまゆり園の犯人のような人ですね。そんなことを思って、心情的に死刑を容認していたんです。

けれど『死刑について』を読み始めますと、まず死刑というのは刑罰として抑止力がないんですね。それどころか連続殺傷事件を起こした人たちが犯行の動機について「死刑になりたかっ

たから」というのを聞いたことがあると思うんですけど、ということは死刑が犯罪を誘発してるんです。その他にも刑事捜査の中で未だに冤罪を生じるメカニズムはどうしても止められないことですとか。面白かったのが海外の事例です。イギリスは1969年に死刑制度を廃止したんですけれど、その７年ほど前に国民の意識調査をしたところ、廃止する直前ですよ、81％が死刑に賛成だったんです。つまりこれはイギリスの国策として、国の政治家が政治判断として死刑を否定したわけです。

そこで私は「ああ、そうか思い当たることがあるな」と思ったことがあります。男女雇用機会均等法が85年に成立した時のことを思い出しました。この男女雇用機会均等法が施行されるまでは女性は採用の面接で「お茶汲みできますか」なんて聞かれるわけなんですが、それまで女性の雇用機会の均等を訴えて活動していた女性たちが機会均等法の法律案が公開された時に反対したんです。反対したというか反発した。なんでかと言いますとそれは理想からほど遠い点が多かったからなんですね。だけどもその当時この法律の制定を進めていた労働省の婦人少年局長の赤松良子さんに以前インタビューしたことがあって、その時赤松さんこう言いました。「内容は二の次でとにかく法律の成立が重要なの。法律が成立すれば人々の意識が変わるから」と言ったのですね。で、あっと思ったんですね。死刑も国民の多くが反対していたとしても、政策としてこれは反対ですと出すと意識って変わるんだなと思うわけですね。

そこでSDGsもそうです。17の項目にわたって目標が設定されているんですが、その目標があると言うことがやはり私たちの日常生活を少しずつ変えていくんだと思うんです。こうしたいろいろなことが『死刑について』には書かれていて、それを読み終えた時、私は自分が死刑に賛成する理由が見当たらなかったんです。こんなふうに本を読むとか、とにかく自分の意識を疑うということは必要で、自分は知っているから大丈夫という場所に安住しないことが大切です。私も死刑については知っているという気持ちで賛成していたんですけれど、実は知らないことがたくさんあったと気が付いたわけですね。ですから皆さんSDGsについてこういうアンケート調査を受けたのを契機として、何かこう意識を開いてもらうと言いますか学んでもらうと言いますか、そういうことが必要なんじゃないかと思います。もちろん当事者に会うとか、現場に行くとかというのが一番わかりやすいと思うんです。けれどなかなかそういう機会って恵まれませんよね。そうしますとやはり一番手近なのは本を読むことです。本を読むことによって知識も増えますし、そうすると自分の判断の役にも立つわけですね。知っていると言って安心しないでください。

このパネルディスカッションの後半では、いくつかそういうSDGsの項目に合うような小説をとり上げたいと思います。ノンフィクションはもちろんテーマがあってそのテーマで書かれていますから選びやすいと思いますが、小説からも意外と衝撃を受けることがあります。私も日頃小説を読んでいる中で、ああそうかと膝を打って理解が進んだ経験が意外とありますので、後半ではそのような本を時間の許す限り紹介できればいいなと思っています。

今いくつかさわりを紹介できる時間があるようです。私は先ほどジェンダー平等について関心がある方が１割もいないことが大ショックだったので、主にそのジェンダー平等かどうかというところをこの後はお知らせしたいと思います。その他にもいろいろあります。貧困問題ですとか、民族間の平等を問う小説もあります。皆さん小説を読むということは、その登場人物と似たような経験をするということですので、意外と共感したり反発したりもありますけれど、実になっていくものなんです。例えば太平洋戦争の原爆の記憶を若い世代に伝えるのに小説って役に立っているんです。井伏鱒二の『黒い雨』や漫画の『はだしのゲン』なんていうのが、若い子たちに読み継がれているんですけれど、原爆の悲惨さみたいなものが小説によって、もしくは漫画によって、つまりフィクションによって伝わっていくということはすごくよくあることです。そういった文学作品を休憩を挟んだ後に紹介できれば嬉しいなと思っています。どうもありがとうございました。

内藤麻里子様ありがとうございました。続きましてご紹介しますのはロバート キャンベル様でございます。日本文学研究者であり早稲田大学特命教授など幅広く活動されており専門は江戸明治時代の文学。特に江戸中期から明治の館文学芸術思想などに関する研究を行っております。それではご登壇頂きますので拍手でお迎えください。

パネラー

ロバート キャンベル 氏

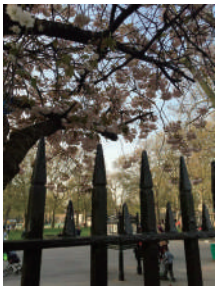
日本文学研究者
早稲田大学特命教授
早稲田大学国際文学館（村上春樹ライブラリー）顧問
東京大学名誉教授

プロフィール
ニューヨーク市出身。
専門は江戸・明治時代の文学、特に江戸中期から明治の漢文学、芸術、思想などに関する研究を行う。
主な編著に『よむうつわ　上・下』（淡交社）、『日本古典と感染症』（角川ソフィア文庫、編）、『井上陽水英訳詞集』（講談社）、『東京百年物語』（岩波文庫）等がある。
YouTube チャンネル「キャンベルの四の五の YOU チャンネル」配信中。

ご紹介ありがとうございます。ロバート キャンベルです。私が小谷さんの調査発表調査結果の話を聞きながらちょっと鬱然とした気持ちになったわけですね。地域の中で、一つの職業として僧侶、お寺を預かってる方々が生活をしてる半径より広い世界と十分なリンケージ、接点を持ち得ていないじゃないかなっていうことを今日のデータを拝見しながら感じました。そういった調査自体と、その調査を実際に行なった方々の努力には、とっても敬意を表したいと思

います。全国的なあるいは全世界の意識調査というものが地域自治体政府によっては多く行われるわけですけれども。このように一つの限られた地域一つの職業に絞って我々全員が今考えないといけない、とても大切な SDGs に関する意識がどうなっているかというリアルを特定する。その断面図をリアルタイムで描くということは、とっても大切なことだと思います。回収率が33.8％ととっても低いということ、それからその中で SDGs の内容を知っている、あるいは知らないという人たち認知度ですねそれから内容について理解してる人がまだだいたい３割ということが非常に低いということが言えるというふうに思います。その中で小谷さんの話の中に最後のほうにあったと思いますけれども、災害に対する備え準備をしているとか、マルシェに地域の方に土地を貸してることですとか、私の近所に私は東京都杉並区に住んでるんですけども、真言宗のお寺が近所にありまして、あの

まあがらくた市をですね月一で境内で行ったり、あの盆踊りですね毎年地域の方々を巻き込んでやっていたり、コロナの間にいろんなことを、オンラインで読書会を行ったりするというようなことをします。そのお寺は幼稚園を経営していまして、毎朝私が出勤をする時にそのちょうどその門前を通るわけですけれども、そこに子供を送りに来る子供を連れてくる保護者だけではなくて、我々にもですね僧侶達、若い人達それから先生たちがこう前に出て挨拶をするわけですね。顔と顔が合って、毎日通ってるわけですから、お互いにその場じゃなくても買い物してる時にも会釈をしたり言葉を交わしあったりするということが、本当に東京のまん真ん中にあるのかっていう。実は私の近所ではそのお寺一箇所のその寺から生まれる様々なその活動からそういうコミュニケーションというものが生まれているわけです。そういったお寺の方々がジェンダーでありますとかLGBTへの配慮に関心を持つ方々が優位的に高いということは、私は感覚的によく分かる話なんですね。ですから如何にそのような接点を社会の中で、お寺と冠婚葬祭が本当に特に人の生き死に、亡くなった時の葬儀や法要の時に出かけていって、お盆の時には色んな所に実際に足を運び家の中で様々な場所で交流を檀信徒と交流されると思いますけれども、その一つのいわゆるその業務を越えて、どのように人々の生活は人々の苦しみや痛みあるいは悩みあるいは喜びを分かち合えるかということが、日本の仏教そのものが生きた文化であり、それから生きた信仰宗教。生きた日本にとっての社会資本インフラになるということに深く関わってるって事を今日まずお話を伺いながら思いました。私はスライドを用意しました。私数年前にちょっとコロナになる直前にイギリス、今写ってるのが大英博物館の私の撮った写真ですけど、そこで葛飾北斎の大きな展覧会を企画をして、共同企画をしていまして、何度もロンドンに行って、大英博物館の深いところで調査をしていました。９時から５時まで仕事ができるわけですけれども、朝早く時差で起きるわけですね。散歩をしますといろんな公園が小さな緑地や公園が周りに沢山ありまして、ちょうど５月でしたのでやはり桜が満開に美しく咲いていました。門前のしだれ桜が元気にちょうど色付いてるのを見て今日とっても嬉しく思いましたけれども、公園の花が素晴らしかったので写真を撮ろうとしたら２メートルぐらいの高さの鉄の柵が張り巡らされていて、私が185cmぐらいですけれども携帯をこういうふうに上に持ち上げて撮ったのがこの写真ですね。でもっと身近に近くから見ようと思って、入り口を探そうとしたら看板があったんですね。入ろうとしたらそこに一枚の看板が書かれています。そこに門番のような職員の方がいらっしゃったわけですけど、入ろうとしたら止められたんですね。でこの看板を読んでくださいというふうに言われました。コラムズ・フィールズ（Coram's Fields）は19世紀の初めからある緑地なんですけれども看板を読みますと、「コラムズ・フィールズ（Coram's Fields）は公共の公園ではありません。公園への大人の入場は子供同伴の時だけ認められます。」と書いてあって、子供を連れてくる人たちだけがそこに入ることを許されるわけですね。私たちの常識、私達で



はなくて私の常識がもう本当に180度ひっくりかえったわけですね。子供がいないと入れない、どういうことですか？ っていうふうに聞くと、いや実はこの周りにはですね。19世紀20世紀からたくさんの子が労働力として地方から駆り出されて工場で働いてた。その子供たちが病気をする孤児になる。怪我をして、そしていろんないたずらをしたりして収容されること、その子供たちを救うための施設がこの周りに出来ていて、この空間だけは子供たちのためにあると、子供がいれば一緒に入れるというふうに子供の状況、子供の困った悩みということに即して公共的な空間をつくるということです。実は日本にもですねこういう人々の悩みや苦労というところからどういうふうに結び合い、公共を作っていくかって言う思想があります。ちょっと今日あのまずこの時間私の時間にあのちょっと限られているので、私の分野であります江戸時代の文学からちょっとひとつをわかりやすい例を見ていきたいと思います。人々はどういう時に生きる手応えを感じるのか、人々とともに結びあって生きるか、実体を感じるかっていうことを福井藩のですね町人ですけども橘曙覧という歌人。幕末に活躍した歌人ですけれども『独楽吟』という52首の和歌を作っていきます。楽しい時つまり苦楽の楽ですね、はどういうことなのかということを書いてるわけです。例えば「たのしみは　あき米こめ櫃びつに　米いでき　今一月ひとつきは　よしといふとき」米びつに一粒も米がないと思ってた時にどこかから出てきて、今月は大丈夫だと子供を養うことができる大丈夫だって、つまり危機不足を回避した時に楽しみを覚えるということです。これをよくある仏教の中でよく言われることだと思いますけれども、苦と楽は文節がないわけですね。苦と楽は常に共にあるものとしてあり。楽しみというものを例えばお金がない中で楽しみは、とぼしきままに人集め酒飲め、ものを食えという時のように非常にお金がない状況不安定な生活状況の中で、その中で人々とともにあること、そういう接点を持つことによって充足を生み出していくということ。これは日本の伝統的な死生観あるいは世界観に深く根付いていることです。いかに僧侶を取り残さない。これ僧侶だけでは

なくておそらく医療従事者ですとか大学の教員ですとか、あるいはお酒を提供する店で働いてる女性達ですとか、いわゆる感情労働ですね。人々の悩みを聞いたり相談をしたり励ましたりすることがライフワークの人々に、現在このインターネットが普及していて、私たちは皆一見繋がってるように見えて、実は非常に細路化している。つまり個別の個別分けになってある一種の孤独状態にあるということが、今回のその調査からそういう状態があぶり出されたんじゃないかなっていうふうに思います。今日後半で色々、話を伺ったり話ができるようになると思いますけれど、私は一つは日本の西洋とは異なる生き様、生き方、あるいは死生観というものを思い起こし、少しそこを勉強して具体的に今、日常地域社会、先ほど過疎化の問題があったわけですけれど、その中でどのように檀信徒等、患者等、生徒たち、お客さん達その人々とそれを一つのきっかけとして元気づけることができるのかそれが自らに必ず還入する戻ってくるものだというふうに思います。私の時間があのこの辺りで、あのいっぱいになったと思いますので以上とさせて頂きます。有難うございました。

ロバート キャンベル様ありがとうございました。続きましてご紹介いたしますのは、平岡聡様でございます。平岡様は京都文教大学臨床心理学部臨床心理学科の教授で、専門は仏教学でございます。『鎌倉仏教』『菩薩とは何か』など多くの著作を手がけており、昨日の本会議においても記念講演を務めていただきました。それ

ではご登壇を頂きます。大きな拍手でお迎えください。

パネラー

平岡　聡 氏

失礼いたします。昨日に引き続いてパネラーということでお話をさせていただきます。二つございまして、前半はですね、今の小谷先生の報告によりますと、まぁかなり SDGs に関しての僧侶の意識が低い。小谷先生はちょっと抑え気味でしたね。もう少しぐりぐり来られるのかなと思ってました。第二部で期待しています。

さて、昨日のお話を踏まえていいますと、やはり世襲制度、それから檀家制度はそういうシステム的な問題です。志の無い方が僧侶として排出されているということが、根本にはあるだろうと思いますが、そうはいえもうこの制度はある程度成り立っているわけですから、そんな中でこれを改善するためにどうしたらいいのかということをちょっと私なりに考えてみました。

一つは、僧侶を養成する段階で何とかならんだろうかということです。私自身もそうですけれども、僧侶になるために勉学と修行とこの二本立てで、これ以外にはない。ところが社会の問題に対してどうも私たちは関心が薄い。ならば、僧侶を養成する段階で勉学と修行に加えて、少しそのフィールドワーク的なものも科目として新設したらどうだろうかと思います。生老病死ということは仏教の中で非常に重要なテーマですから、その生老病死の現場に実際に足を運んで働いてみる。あるいは観察する。そういうことによって、若い僧侶の方にまずは社会ってこういう問題があるんだよということが分かるように、そういう機会を提供できないだろうか。簡単に言うと、病院であるとか福祉施設であるとか、ボランティアであるとか、その他、色々あると思いますけれど、まずそういう所に行って、現場でですね、実際の人間がどんなことに悩み、どんなことに苦しんでいるのか、それをきっちりと把握するような、そんな教育システムというのを作っていくっていうことが一つ。

もう一つは、そうはいえもうすでに僧籍をお持ちの方もいらっしゃるでしょうから、そこはもう宗派がイニシアチブを取って、そういうことを啓発していくと言うか、誘発して行くと言うか、そういうところに実際に僧侶を巻き込んでみる。行動を変えることによって考え方が変わるということは昨日申し上げた通りですし、そういうことに宗派が主導権を握って色んな活動に僧侶を巻き込んでいくことによって意識を改革していくということも一つあるかなと思います。これが一つです。

もう一つは小谷先生の前半のところにあったように、「SDGs と仏教の接点はいったいどうなのだよ。そんなの関係ねぇよ」っていう人も一部いらっしゃるかもしれませんが、私は決してそうではないと思います。一つは、まずこの SDGs の理念である「誰も取り残さない」を聞いた時に『観無量寿経』の「光明遍照　十方世界　念仏衆生　摂取不捨」の摂取不捨を思い出しました。「摂取して捨て給わず」、仏の慈悲というのは全ての人を漏れなく救い取るのだというところとの親和性があるというふうに思いました。

もう一つは日本の宗派は、大乗仏教に淵源を持つわけですから、「菩薩」という事が共通の基盤としてみんなが共有するコンセプトだと思います。「菩薩」に何が必要かと言うと、「願」と「行」です。誓願を立てて、そしてその誓願を実現させるために修行をするこの「願」と「行」

ということが「菩薩」の基本になります。「願」の中もさらに分けて「総願」と「別願」があります。「総願」は昨日の法要でもありましたように「衆生無辺誓願度　煩悩無辺誓願断　法門無尽誓願知　無上菩提誓願証」ということで衆生全てを救いますよ。煩悩を全て断ちますよ。法門を全て知っていきますよ。そして仏道を完成させますよという四つ、またこれに加えて「別願」というものがあります。

個別の誓願はそれぞれの個性に合わせて願を立てていく、その中で一番有名なのが阿弥陀仏の四十八願ということになります。四十八願の中身よくよく見ていただくと、平等性を担保しましょう、私の建てた仏国土に生まれるものはこういうふうにしたい、私の仏国土はこんなふうに荘厳したい綺麗にしたい、環境を整えたい、というふうに謳うわけです。そしてそれを実現させるために法蔵菩薩は修行をしたということになると、まさにこれはSDGsが誓願に置き換えられないでしょうか。

人権を保障する、飢餓をなくす、貧困をなくす、教育を保障する環境を整える、これを誓願に置き換えると、今度はその誓願を実現させるために私たちは具体的にどういう行動をとればいいだろうか、こんなふうに考えると、私はSDGsと仏教は非常に親和性のある考え方ではないかと思います。昨日も「わかる」と「かわる」ということを申し上げましたけれども、その考え方が変わると環境が変わっていきます、という方向ももちろんあるんですけれども、環境を変えることによって私たち人間の考え方も変わる。先ほども研修会のことを言いましたけども、実際にそういう気がなくてもまずやってみる。やっていく中で、その人の中に眠っていた菩薩の心がだんだん芽生えてきて、そしてこんなこともしたらいいんじゃないか、あんなこともしたらいいんじゃないかというふうに行動変容されていくということもあると思います。

そんなことで、考え方を変えて行動を変え、環境を変えていくということも大事ですけれども、まずは環境を変える。まず目標で自分の行動を縛っていく。その事によって自分の行動は変わり、意識が変わるという側面もあるのかなと思います。

SDGsは17の目標ですけれども、これを個別の誓願というふうに捉えた時に、では私たちはその誓願の実現に向けて具体的にどういう行動を取ることができるかということは、考えられると思います。何かを実践する時に、黙って何かをしようとするとなかなか実現するのは難しい。たとえば、体重を今月末には何キロにすると言っちゃったら、それで縛られますよね。私はあんなことを人前で言ったし、「これ守らんといかんわ」、そんなふうにやっていく中で段々あーそうかそうかと気持ちが乗ってくるということがあります。

それと同じように、SDGsもまず目標を設定する。「願」を設定する。そしてそれの実現に向けて実際に行動していくと、そういうふうな環境を変えることによって考え方が変わっていくということもあるのではないかと思います。内藤先生の話でもね、法律ができると人の意識が変わるということをおっしゃいました。それもまさしくそういうことだろうと思います。ということで、SDGsそのものを実践するということよりも、それを共生ということに置き換えて、こういう社会を実現したいんだ、そのために自分が何ができるだろうか、ということを考えると、当然17の項目には、どっか当てはまるものがあると思いますので、それを私は私なりに自分の立場で実践をしていくんだと考えると、SDGsと仏教っていうのは大いなる親和性があって接点があるかなというふうに思います。

はい、前半のところではこの辺にしておきます。ご清聴ありがとうございました。

パネルディスカッション

司会：皆様にご案内申し上げます。パネルディスカッションを開始いたします。どうぞお席の方にお戻りいただきますようお願い申し上げます。
それでは小谷先生よろしくお願いいたします。

小谷：はい、ありがとうございます。誰も取り残さない社会の実現に向けてというテーマで話し合っていきたいと思います。私は最初にこのテーマを聞いた時に「僧侶が誰も取り残さない社会の実現に向けて何ができるのか」を目指してらっしゃるのかなと思ったんです。でアンケート結果を拝見しますと、先ほど報告させていただいたように僧侶自身が社会から隔絶しているのですから、社会に取り残されている人たちを救うことができるのでしょうか。どんな人も幸せに自分らしく生きがいを持って生きていける社会が理想です。

僧侶のみなさまは、幸せですか？ 生きがいを持って生きておられていますか？先ほどの調査結果では、僧侶は関心が低い。低いし、行動もしてないと申し上げました。関心を持たなくていいと思うんです。やってみることから関心って芽生えるんじゃないかなと思います。私はコロナ禍で、毎朝、地域のゴミ拾いをはじめました。ゴミ拾いの活動でいろんな地域の問題が見えてきました。つい２週間前も孤立死をした人がいましたが、検死の様子を暇なおじいちゃん、おばあちゃんが見物しながら、「明日は我が身だな」とみんな言ったんです。その人達の話を聞いて、私は、こういう人達が身近にたくさんいるんだと初めて知りました。この人たちのために、私なんかしなきゃいけないなと、私はこれまで地域と接点がなかったのですが、たとえ関心を持たなくても、自分が何か行動してみたら、接点ができ、問題がみえ、自分に何ができるか考え始めるのではないかと思います。

社会の一員として、なすべきことをなさっていますか。僧侶である前に一人の人間として何ができるかってことを考えていただきたい。僧侶としてあるいは、皆さんが一社会の人間として生きがいをもって毎日暮らしてらっしゃるか。私はそれが SDGs 問題なんじゃないのかなと思っています。で昨日の平岡先生の講演の中で私印象的に残った言葉がいくつかあるんですけど、一つは共存ではいけないと、共に存在してるだけではいけなくて、共生ではなくてはいけないと、お互いに異なる人同士でもこの交流がないと、共生社会でないといけないというお話をされました。そこでパネリストの先生方にちょっとお話をしていただこうと思うんですけれども、あのロバート キャンベル先生、僧侶があの社会問題の中でとても意識が低かったジェンダー問題と LGBTQ の問題については、ロバートキャンベル先生は、LGBTQ の立場として生きづらさとか、その共生社会の在り方について何か思うところがあったらお話しいただきたいなと思っています。

キャンベル：ありがとうございます。今お話をうかがって思ったのが、ジェンダーや LGBTQ の個別の課題とはちょっとだけずれますけれども、僧侶になる以前に、本当に何かこう地域社会の一員としても十分にやってること。やってることっていうことは、その期待されてそれが責任として義務としてあるということ以上に、自分のためにも自分の周囲のためにも参画しているかどうかということの棚卸しのようなことを人や社会の接点によっても違うと思うんですね。今日話を伺って思ったのは、あの僧侶っていうのは、僧侶が例えばその人と、先ほど私は感情労働っていましたけれども、やっぱり多分

に人にその仏教、仏の非常に深い緻密な知恵や処世、処世術っていうんですかね。どうやって生きて、生を全うしていくか、普遍的なそういう価値っていうものを与える。分け与えるということは、とても重要だと思うんですが、今のその日本人は仏教から僧侶からそれを求めているかって言うと、求めていないんです。あのすごく面白い韓国ドラマがあったり、インターネットで自分がつながっているそのネットサロンがあって人と繋がっていて、そこでその中で自分のアイデンティティとか自分の実態ということを表現することもでき。いろんな形でいろんなメディアや所謂コンテンツが今世の中にあって。ちょっと前の二世代ぐらい前までは、仏教というものが権威あるものとして、教養としてあったとして、まずこう何て言うかな、前提として、日本人として地域社会の中で暮らしていて、お寺があって、僧侶があって、おばさんが何かあった時に相談をしていたという景色があったと思うんですが、それが置き換わってるんですね。とって変わられているんですね。だからそれをまずそのことを良しとするのか、あるいはそうではないのかっていうことは、これ多分仏教界の中では、いま尾根伝いにいるんじゃないかなっていうふうに思います。世界中分断がおき、昨日の平岡先生の話の要旨にお書きになってましたけど、例えばそのロシアのウクライナに対する全く不条理な侵略拷問。人々の人権ということを蹂躙するようなことを国家主義的な元で、それが今の私たちの世界のリアルであって、その中で仏教というものが世界観死生観として、あるいは人々が私たちが組織化していく上で、どういうヒントがあるのかってこと、とっても大切なやっぱり日本が手放しちゃいけない。手放すことが本当世界のためにも望ましくない、不幸なことだと思うんです。だから僕はそこは、尾根伝いの上を縦走しながら、やっぱり突破口を見つけていくべきだというふうに思うんです。もう一つ僕思ったのは、いろんなこの地域社会と本当に関わっている人々こそ、山梨県内僧侶仏教に関わっている人達が交流をしていたり、コミュニケーションを取れてるということが、有意そういう相関性があるということをおっしゃったわけですけれど、実はこれいろんな調査でそれが明らかになっています。今年の４月に電通が行った全国の SDGs に関する生活者調査というものがあり。小谷先生ご存知だと思うんですけれども、1400人の10代から70代の人達を対象に問うたところを認識率がだいたい86％でこれは2018年の時、最初にこの事を聞いた時より６倍ぐらい増えてるんですね。内容まで理解してる人たちがどれくらいいるかって言うと34% ぐらいですね。ですから実は、山梨のその僧侶達とそれほど変わらないかもしれない。僧侶たちは、やっぱりこうリアルって言うかやっぱり生きてる人達としての認識それ以上のものがないということも言えるけどあるんですね。ただ10代は、初めて過半数を超えてるんですね。10代20代は内容について理解してるということと、もう一つが電通の調査ですと対象として、この合わせて重ねて考えて面白いなと思うのは、特に若い人達もそうですが生活者たちが積極的に SDGs に取り組む企業に好印象を持っているということだけではなく、その企業その組織が提供する物やサービスへの利用意向ですね。利用したいその傾向がとても高まっているということです。これは今経営学では、パーパス経営という風によくいますけれども、どういう風に会社が配当を受けてる人たちとかお客さんだけなくて、すべてのステークフォルダ達に価値を創出できるかということが、収益に結びつくということが、この10年間大きな変動なんですね。それをちょっと置き換えて今日の話に戻しますと、仏教をそれからお寺を、そして檀信徒を抱えて、とっても大切に地域社会の私もその一員ですけれども、我々の生活の一部分ですね。お墓があるお寺、そして教育機関もあるそのお寺を、どういう風に求められないもの

から、活学、活きた学問、活きた学び、学びの喜びであるとか、それから相談ができる場所に切り替えていけるかっていうことが、これ一番今日多分このお話の中からシャープに浮かび上がってくることかなという風に思います。ちょっと長くなりましたけどそのLGBTに関してでありジェンダーに関しては、これは全く今申し上げた例えば生活者等が経営者に対するある企業に対するいろんな発信、ジェンダーに関しては女性達の立場ということを分かってて、どうするかということを商品として、サービスの中で表現してる会社ほど黒字、営業が実績がいいということとか。それからLGBTQの話もありましたけど、私は当事者の一人ですけれど、活動家ではないんですけど、やっぱり興味深く見ています。若い人たちが、いろんなサービスやLGBTと言われる人たちへの理解や例えば結婚の平等ですね同性婚はもう過半数同意をしてるわけですね。日本が全世界のG7中では唯一LGBTのその差別を黙視してると言うか、その法律を作ってないのは日本だけなんですが、そこをどうしてそれがノーマルだと普通に見て、それでずっとやって何もないかのように意識を低いまま執行できるかって言うと、国の政治なんですね。政治の中には様々な団体、様々な宗教団体もそうですが、ちょっとここでどこまで言っていいかどうか分かりませんけれども。あの神道政治連盟でありますとか、様々なロビー活動といいますか、重要なこともあり、あんまり深く考えずに国民の本当の意識が思考がどこにあるのか、問題がどこにあるかっていう事、細かく実証せずに伝統的なその文化というものをそのまま維持していく、固持していくということで、これ実は崩れているんですね。伝統的なものの中に大変価値の高いもの世界に共有。小谷さんのようにその例えばカンボジアに持っていくことも出来るものも沢山あるわけですけれども。このままではですね、ちょっとそれがそのまま潰えて無くなっていくのが見えているかなという風に思いました。

小谷：ありがとうございます。平岡先生が昨日ご発表頂いた中で多様性の重視っていうお話をされていたんですけれども。それにちょっとあのキャンベル先生ばっかりにお話しいただいて申し訳ないですけど。私あのキャンベル先生が書かれた文章の中で、寛容、私たちは多様な物に対して寛容にならなければならないっていう寛容って言葉をよく使いますけれども、寛容する社会とはおかしいじゃないのかってロバートキャンベルさんが書いてらっしゃる文章を読んだんです。私とてもすごく納得がいきまして、寛容という言葉の問題についてお話しいただけますか。

キャンベル：そうですね寛容というのはあの誰も多分反対しない。寛容であろうとするということは、私達は全員それはやっぱり理想とすると思うんですけれども。ただ人々のその少数者、何かで困っている人に寛容にそれを対応するために具体的に今2015年から与党を始め他党のLGBTへの理解を理解増進に関するワーキンググループ。稲田議員が立ち上げた。稲田朋美議員その立ち上げたものですけど。７年間やってるわけですけど何の成果も出してないわけですね。その宣言を読みますと２行目にLGBTに寛容な社会を目指しましょう。寛容という言葉を国語辞典で調べると、一行目にあの普段は咎め立てするべき行動や人々を大目に見るていうことが書かれていて、寛容な措置があるとかですね、寛容な措置っていうのは、だいたいあの罪人に対して告発ていうか、判決が下りている。刑期をどうするかっていうこと。あの寛容な措置。日本語の寛容の中には上から目線が非常にあるんですね。その上から目線は、言葉尻を私が取ってあのいろいろ言ってるように誤解する人もいるんですけれども。それが意味するということが、つまり自分の意識っていうものがどこにあるのかということ。それどういう風にそれを測るのか、そのためには先ほど平岡先生がおっしゃったように、僕はやっぱり他流試合が必要です。フィールドワークが必要です。若い僧侶たちには勉強と修行だけではなく。あるいは修行の中にも一環として病院であるとか、いろんな現場であるとか、そう自分と異なるボキャブラリ自分と違う気圧の中で暮らしてる人たちと、ただ情報収集ではなくてそこに一緒に行動する経験。それがないとそれがない人たちから

寛容という言葉が出てくるわけですよ。実体がない実感がないですね。すいませんちょっと長くなってしまいますけど、そういうことをとってもやっぱり感じますので、それはちょっと今日の話にもちょっと多分通じるところがあるかなと思います。

小谷：フィールドワークの実践が大事だっていう話なんですけれども、内藤先生はそのフィールドワークを実践できないのであれば、本を読むことで疑似体験をするっていうご提案をされてると思うんですけれども、自分の今までの常識を疑うためにはどうすればいいと思いますか？

内藤：やはりですね、先ほどもちょっと言いましたけどノンフィクションはタイトルでだいたい何について書いてあるか分かりますが、小説はタイトルだけでは全くわからないんですね。だから闇雲に読むわけにもいかないので、是非私はいろいろ紹介したいと思うんですけれど、今キャンベル先生が寛容ということについてお話になりましたね。そこで私ははったと思い出した本があります。その本をまずちょっと紹介したいんですけど、朝井リョウの『正欲』というタイトルの小説です『正欲』はりっしんべんの性ではなくて正しい欲と書くんですけれど、何が書かれているかと言いますとですね、ある性癖について書かれてるんですが、この性癖はLGBTよりももっとニッチな性癖なんです。もうとてもじゃないけど口に出せない。LGBTはまだ世の中に言われ始めたけれども、この言えない私たちの苦しさをどうしてくれるんだという悲鳴にも似た悲しみと、だけどどうにもならないという絶望感で生きている主人公のことを書いているんです。小説というのは特殊なことを書いて普遍性を持たせるということができる表現芸術なんです。その性癖ついて明かしちゃった方がいいのか、それともネタバレになるからあまり言わない方がいいのかな。でも皆さん読んでくださるよう一人でも二人でも関心があって手に取ってくれることを願ってまあちょっとだけ言いますけど、主人公が性欲を覚えるのが濡れた服なんです。人が歩いていてスプリンクラーか何かバシャッと濡れちゃったりした時の濡れた服に主人公たちはドキッとしちゃう。それを言えないって話なんですけど、これね物語として読んでいくとある時にハッと気づくんですよ。特殊なことを書いているんだけど、ちょっと待てよと。私たちはそれぞれ人に言えない秘密を持っていませんか。胸に手を当ててよく考えてください。これだけは言えない墓場まで持っていくということ、それと同じことだと受け止めていいんじゃないかなと私は思ったんです。そうしたらば、その濡れた服に欲情するということと、私がこの胸に抱えて絶対に人には言えないと思っていることって、同じなんじゃないかな。そしたらね、LGBTにしても、そのニッチな性欲にしてもみんな同じなんだって思えるようになるんです。もしかしたら同じにするなんてとお叱りを受けるかもしれないんですけれども。まあ考えてみるとみんな一人一人、特別なんです。そういうふうに考えられるきっかけになるのがこの『正欲』で、これ文学としてもとても良い本で、柴田錬三郎賞を受賞しました。これはみんな一人一人に抱えている秘密があるんだよっていうのを浮き彫りにしたわけですけど、よくぞ書いたと思いますし、恐れずトライしたな作品なんです。こういうのがあるので本当に時間さえあればもっとお話ししたいです。先ほどキャンベルさんが触れた寺院も企業が今の時代の中でどう選ばれているかという観点で、お寺もそのように頑張ればいいんだとおっしゃいましたけど、その言葉に触発されました。その言葉と同じように、触発される小説もありますのでもしお時間があればば紹介します。

小谷：内藤先生に質問です。普遍的な問題だとか自分の周りにも当てはまるなっていう思考回路は、小説として読んだのでは難しいと思うのですが、どうすれば本を読むことで自分の視野が広がるような読み方ができますか？

内藤：あのですねそれはね先ほども私、認知についてとか自分の常識を認識を疑えと申し上げましたけど、自分を信じないことです。優れた文学作品というのは特殊なことを書いていますけれど、それを虚心坦懐もしくは面白がって読んでいると、ハッと気づく瞬間って絶対出てく

るんで、それが普遍ということなんですね。芸術作品というのはそういうものなので諦めず途中で止めずに読めば、ハッと気づく瞬間が必ず出てきます。これは本当に不思議なんですけれど。全ての方がそうだとは言いません。皆さんにとってもしかしたら別の本の方が、ある人にとってはそういう瞬間を呼び起こすかもしれません。たまたま私は『正欲』でものすごく普遍化されたんですけれど、何冊か読んでみてみると、そういう力が自分の身に付きますし、その力っていうのはやはり人のことに思いをいたすことにつながると思うんですね。自分だけの問題ではなく。そんなふうに考えます。

小谷：ありがとうございます。私は昨日の平岡先生のお話を伺っていて、行動もしない、座ってるだけで頭の中で考えるというのは、お坊さんの姿をイメージしたんです。フィールドワークが大事だとおっしゃいましたけれども、何をやっていいか分からない僧侶は、どうすればいいと思いますか？

平岡：それは宗が音頭を取って、何か企画をするとか研修会するとか、それからこういう活動があるから、と働きかける。どれぐらい強制力を持たせるかは問題だと思いますけれども。自分からやるって事はなかなか難しいんだとすると。最初のきっかけは他律的でもいいから、そういう外からの働きかけというのは大事じゃないかな。私も偉そうに言ってますけども、例えば2011年の3.11で被害が起こって、それでうちの大学でもボランティアをどうするんだみたいなことを議論しました。それで結局９月の段階で私も学生を連れて現場に行きました。

　これも自分で自発的に行けたかって言うと、なかなかそうはならない。学校で決まって学生を連れて行くということでもって初めて私も行動することはできた。でも行ってみたら、やはり現場で見たらすごいですよ。仙台の市内から海岸線に向かって歩いたんですけれども、海に近づくにしたがってもうその荒廃の仕方が本当に目を疑うような状況。そして仮設住宅にも行って少し傾聴ボランティア的な事をしました。それも行って初めてわかることもあるし、だから自分で行動を起こせないんだったら、そこは宗が音頭をとってやるしかないのかなというふうに思います。

小谷：宗が音頭をとってやりますかね。なんでそういうことしなきゃいけないかってことがわからないじゃないかと思うんです。お坊さんに。

平岡：でもさすがにその宗は、執行部というと言葉が悪いんですけど、ある程度仏教にも理解があって、こうしないといけないという人が、舵を取っている組織であるというふうに私は認識しています。もちろんあの時には浄土宗なら浄土宗で、ボランティアに行きませんかみたいな、あるいは募金活動でみたいな働きかけはありましたよね。まあそういう意識がないんだったら、こういう機会をつかって是非やりましょうってことを訴えるしかないのかなと。

キャンベル：あの平岡先生、僕の方からちょっと聞きたいんですけれども。先ほど一つの例えとして経営してきたというか本当に近接する一つの社会の中でこういうことがこれも仏教の世界においてもそれを考えないと、という話をしましたけれども。経営にしても先生が学園長なさっている大学、あの教育機関においても評価がとっても大切なんですね。ですから何かを計画を立てて予算を取って執行し、それをその実績を報告すると同時に評価を仰ぐというサイクルがあるんですね。そのサイクルっていうのはお寺にあるんですか？ あの評価つまりそんなことをしても、先生の今申されていること、若い人達に色んなことやっていくことの、振り返りも大事ですけどもう少し具体的なその評価が見えていて、お寺ってあまり選べないじゃないですか、引っ越しをしても元々のお寺にお墓があってそこにお盆に帰って、お墓の掃除をしたりお参りをすると（私もしてますけれども）そのお寺の評価は、食べログみたいにはしたくないんですけど、このお寺が生きてるのか生きてないのか端的に言うとね。

平岡：その場合は誰が評価するんですか？

キャンベル：第三者機関ですね。

平岡：ああなるほど。

キャンベル：それはおそらく、お寺それぞれ各宗各宗宗門の方々とそうでは無い方が集まって、ある機構を作らないと信憑性はないと思います。それが私今聞いてハッと気付いたんですけど、完全に欠落しているんですね。

平岡：そうですね。あのそういう評価の対象にこれまでなってこなかったろうし。今先生がおっしゃったように第三者評価を立ち上げてっていうことであれば、ある程度客観性が担保されるけれども。その宗が第三者を指名して、そこまで自分たちにやるかっていうと、難しいですよね。できたらすごいと思います。私も教育機関に勤めていて思いますけども、この評価が難しいのは、評価が始まっちゃうと、評価に合わせて行動するようになってしまうことです。

キャンベル：それはいけないんです。自己評価でもいいんですよ。ある程度それはプライドにもなるわけですよ。自分たちがやってることが同じ世代の同じ宗派の人たちと比べてこんなに、あのお金にもならないのにやってるのに、それがなかなかその地域すぐ目の前の人達は分かってるかもしれませんけども、もっとやっぱり自分より大きい世界に発信したいっていうのが現在だと思うんですね。そのために評価っていうのが。

平岡：先程おっしゃったように、SDGs に取り組んでいる企業が成績も良くなって、認知度もそれからブランド力も上がってくるということをお寺に適用するとすると、もし仮にですよ、いろんな宗派の方が来られていると思うけども、それを先駆けてやったら、それは～宗違うねってことになるかもしれないし。もちろんその評価の仕方とか細かいところも難しいと思いますよ。だけども、それこそ法律を作ったら人が変わるみたいに、とりあえずそういうシステムを入れることは大事でしょう。評価の仕方にはいろいろ問題点はあるけれども、でもここまでして我々の宗は変わろうとしているんだっていうところを社会に対してアピールするっていうことはやっぱり一定の力があるように思います。

内藤：私はもともと新聞記者だったんですね。定年退職するまで文学を取材していましたけれども、宗教関係の取材もずっと続けていたんです。その中で常々感じていたことは、例えば新聞ですから何か活動しているお寺に行って取材するわけですね。一般市民のためになる活動をしているところとか。で、そういうところに取材に行って何年も何年もお付き合いしていますと、何回か聞くわけですよ。「あなたは、ご住職は、すごくこんなふうに活動していらっしゃるから宗門の中で評価高いでしょ？」って聞くんですね。そうするとね、「何の評価もされてないよ」と言われるんです。評価されるどころか、「あいつは異端児だ」みたいな感じの評価です。そういうお坊さんがどうなっていくかと言うと、50、60とかになって女性で言うと更年期が出る頃に、やはりね若干心が痛むんですよ。心が折れそうになるんですね。ちょっと調子を崩しちゃったりする人も出てくる。宗門の人達は今までそうやって評価しなかったどころか貶めるケースがあるのを私は大変よく耳にしました。だからその中で評価軸を作るというのは、すごく難しいことだなあと、どう有効な評価軸が作れるのかというのは問題になるんじゃないかなと、伺っていて思いました。

キャンベル：僕はあまり定量的なものじゃないと思うんですね。もちろんそれをデータを積み上げて、どれぐらいの数どういう活動してるかということをしないといけないですけど、定性的な指標。質に関するもので、それは多分仏教の世界の中でしか多分指標を作ることできないと思うんですね。我々外にいる人間をなるほどこういうことで指標があって、こういうことで活動していて、フェアにおっしゃるように全国いっぺんにドンてやるんじゃなくて、ある地域のある宗門の中でまず立ち上げて、有志たちで作れば面白いと思うんですけども定性的なものをその軸、どこでも今は文系の文化学一番基礎文系科学の虚学の一番真ん中にいるんですけれ

ども。ですけれどもこの３年間内閣府から、これから科学技術基本法というものが変わるから、社会系と文系が一緒に入る。あそれいいことだねってみんなが最初に言うんだけど、いやちょっと待って理系と一緒に評価される。どんどんとにかく予算も削られて、人員も人事も動けなくても、すごい危機感が３年ぐらい前からあるんですけれども。それに対して何を我々が、今しようとしてるかと言うと定性的なピアレビューですね。つまり同じ業者同じ業界にいる人たちの間にどういう風にレビューができるのかどう見えるのかということですとか、点数だけじゃないんですね。１か10かだけじゃないんですね。あのエピソードであるとかそういったものに基づいてくる評価をしていく。

平岡：あのいいですか

小谷：はい、どうぞ。

平岡：１つ聞きたいんですけど、ヨーロッパで例えばキリスト教の場合、あるいはキリスト以外でもいいんですけど。そういう教会が評価されるということはありますか？

キャンベル：それはあまり多分無いと思います。地域とのその関わり方がいろいろ違うということと。あと毎週ミサで集まり、コミュニティーを作ることが教義の中心にある宗派と、そうでははない冠婚葬祭的なあるいは毎週ミサに行って懺悔をしたりするということを淡々と繰り返していくということが中心の教会あるいは宗派ていうものがあるので一概にキリスト教では言えないと思うんですが。まあアメリカのエバンジェリストって言われるような人たちにとっては、このコミュニティーの中心が教会なんですね。それは非常に評価、どれぐらいの人がそこに参加してるかどうかっていうことを公開するんですね。テレビ番組を作ったりていうようなことぐらいに、日本の仏教ではその考えられないような。逆行してるような、行き過ぎたポピュリズムに乗ってる宗教もあればそうではないものもあるように思う。

小谷：本願寺派では希望者のみ寺院診断をしてお返しするってことになっています。診断の項目は、お寺をきれいにしているか、掃除をちゃんとしてるか、当たり前の話なんですけどそういう目標を掲げる。それをクリアしてるかしてないかという診断があるんですね。

それから、さっき内藤先生が、一般社会から見て素晴らしい僧侶だなと思う人は、宗門の中で評価されないっていうお話がありました。少なくとも、私が知る限り、この20年、社会が変わっているのに、お寺はほとんど何も変わりません、やる気がないからです。やる気がないなら、淘汰されるだけです。選ばれないだけの話です。お坊さんの仕事は教えを広めることだと思うんです。山寺にこもって人知れず、世界平和を祈っていてもいいかもしれませんけど、教えを広める事が僧侶の役割の一つですよね。教えを広める為には人と接点を持たねばなりません。だから社会と関わることが大事なんじゃないかと思います、でも関わりを持つためには何から始めたらいいのかっていうことが分からないお坊さんがいっぱいいるんじゃないかと思って、キャンベルさんどうすればいいと思いますか？

キャンベル：えーと私が12歳の時に私が大好きだった隣に住んでた祖父が突然死したんですね。11月の第３木曜日だったのかな感謝祭の日にだから覚えているんですけど。サンクスギビングの日にあの本当に家族がたくさん集まって、いつも我が家に集まったアパートだったんですけども、集まって七面鳥を食べたり、あのアイルランド系の人達ですね。で祖父も祖母もアイルランドから移民した家ですから敬虔なカトリック信者ですね。その従妹の中にシスターもいれば、神父もいるわけですけども、皆集まって、祖父が自分のアパートに戻って、２時間ぐらいしたら出てこないから、お婆さんが見に行ったら亡くなっていたんですね。それは他の家族が帰った後のことだったんですけども、大変なショックだったんですね。今も覚えているのが、ほんとその時に救急車を呼ばないといけない、警察を呼ばないといけないですけど、一番最初に呼んだのは神父だったんですね。でその神父

がその亡くなるほんと直前に最後の言葉をかけてお見送りをするということが我々は。私は教会にいつも通ってたんですけども。本当に常識のように本当にも３分４分ぐらいで、救急車より早く、神父が来て最後のその儀式をして下さったんですね。生きてる呈でそれをするわけですけれど。その後に救急車が来たことを覚えてます。そういうときにそれが一番究極、究極ていますか、人が生きる時にまさに小谷さんのその専門でもいらっしゃる死生学に関わることです。ちょっとすいません逆質問したいんですけど、小谷さんがご自身のその専門の中で、そして私は以前あのインタビューを読みましたけれども、あなた自身11年前だと思うんですけれども、パートナーのご主人をですね突然死で亡くなられて、その時にあの咄嗟にどういう行動に出たかということをお書きになったのを私は読んだことがありますけども。お聞きしたいのがその今、今そういう状況我々は一人一人直面するわけですね。日本の仏教が人をこれから今生きてるあらゆる世代の人たちにどういう価値を持ち得るのか、そのために一つでも二つでも今何をしなければならないのかということ、できればご自身の経験から少し話をいただけますか。

小谷：私の夫は12年前に朝起きたら突然死んでいたと。そのとき私が思ったのはなぜ死んでるんだろうって。健康な人が突然死んだので解剖に回って、何ヶ月もかかって解剖結果が出たんですけど四・五ヶ月たって心停止。それだけだったんですね。私も十何年経ちますけど未だに死んでないと思ってるんです。よく死の受容とか言われるんですけど。死は何で受容しなきゃいけないのかがわからないです。死生学の学者ではありますけど。でその平岡先生が昨日、身体と脳化の話をされていましたけど、頭では死んだことはわかってますが、死んでいく過程もないし、死因不祥。こうなった時にそのいろんな人がかわいそうですねって言われるんですよ。それにものすごい違和感があって、なんで私がかわいそうなことがあろうかと、私がかわいそうじゃなくて、死んでも知らない死んだ夫の方がかわいそうであって、私はちょっとかわいそうじゃないと。私は今「没イチの会」という死別当事者の会をやっています。何から始めようかなと思ってらっしゃる僧侶には、ぜひ「没イチの会」をやっていただきたいと思います。配偶者を亡くして独り暮らしになってる方は地域にたくさんいます。亡くなった人のことをしゃべりたいのに、配偶者がいる人に亡くなった人の話をすると寂しいのねかわいそうねって言われるんです。亡くなった人の話をただ聞いてもらい、聞いてあげる場が地域にはないのです。よくよく見ると、こんな風に、できることいっぱいあるんです。まず何かから始めてください。それをやっている間に何か気付くんじゃないかなと思うんですけれどもね。どうぞ内藤さん。

内藤：さっきから私は否定的なことばっかり言って申し訳ないんですけど、全日本葬祭業協同組合連合会さんが行った調査が今年発表されましたね。葬儀社を対象にその葬儀に来てくれた僧侶のなんて言いましょうか、葬儀に接する態度について葬儀社に聞いたんです。そしたら問題のある行動があったと答えた葬儀社が半分ありました。この調査の素晴らしいところは問題行動がありましたかと聞いただけじゃなくて、どんなことが問題だったか聞いてるんですね。それをまるっと要約しますと、上から目線。遺族に寄り添わない。お金の話ばかり。これが調査で浮かんできた僧侶像なんですね。上から目線とか自分では思っていないかもしれないけど、でもそうじゃないです。それが皆さんの普通かもしれないけれど、一般の我々から見ると、そうではない。もっと本当は寄り添って欲しいと思っている人たちがとても多いと思います。だから寄り添うことから始めるといいのかなと思いました。

小谷：お坊さんの一番悪いところは人の話し聞かないというとこなんですよ。喋るのは得意なんですけど、人の話は一切聞かない。まずあの寺庭婦人がいる方は坊守さん寺庭婦人の話を聞く、これは多分修行かもしれませんけど、人の話を聞くっていう、そこが私大事じゃないかなと。人の話聞かないとどこに問題があるのかわからないですよと私は思います。平岡先生お坊さんとしてどう思われますか？

平岡：はい、どうしても話が世襲制にいってしまいますね。私自身も小さい頃から、小坊ちゃん小坊ちゃんて奉られて育ってきてしまっている。なので、私たちの常識と世間の常識とは完全にずれちゃっているんだろうなと思いますので、どっかでそのねじれを直していくということをしないと、もう普通に喋っているようでいてもそれは上から目線になっているのかもしれません。

私の先輩に当たる先生が言ってた話です。その方もお坊さんなんですが、「私はあるとき人に言われたんだ」、なんて言われたんですかって聞いたら、「僧侶はすぐに床柱を背にして座りたがるんだ」っていうこと言われたんだ。知らず知らずのうちに、まあどうぞまあどうぞと上座に座ることが、当たり前になっている。だから自然と人から言われなくっても上座の床柱を背に座っている。それがもうなんかお坊さんの常識になってしまっている。ここは怖いところですね。やっぱそういう自分自身をもう１回見直してみる。

内藤先生おっしゃたように、自分の認知をまず疑うというところから始めることも一つなのかなというふうにも思います。エピソードついでにもう一つ共有したいので言っておくと、警察官は制服を脱いでも警察官だけれども、お坊さんは衣脱いだら、坊さんでなくなるっていう批判もあります。警察官は非番の時でも犯人を見たら追いかけるだろうけども、お坊さんは衣を脱いじゃうと、京都であれば、祇園でハメ外して遊んでしまう。そういう所まずは自分で襟を正し、自分自身の行動を振り返って見る、内省してみるそういうことも一つ大事なのかもしれません。

小谷：私お坊さんと喋っていてすごい思うのは、世間とズレてるってことが自慢だと思ってるんですよ。それがおかしなことだと思ってないので、それがおかしなことだって思っていただくためにはどうしたらいいのかということをずっと思っているんですよ。

平岡：あの宗教だし出世間てことは大事なんですよ。世間を超えているということ。ただ超えるということと同じレベルで非世間。こうなっちゃっていないだろうか。そこは非常に難しい。超世間というのはその二つを止揚したところにあるわけですから。止揚もしていないのに、そのアウフヘーベンしていないのに、なんか自分は世間を超えてるみたいな視点で喋ると色んな誤解を招くんだろうと思います。

小谷：ありがとうございます。

キャンベル：私は、あの特に僧侶とお話をしていて、私は四半世紀ほど前に山梨県のある家の養子になったんですね。私の養母はちょうど今年が十三回忌ですけど、日蓮宗で、この聖園という身延山にお墓があって毎年墓参りにここに来ますし、お盆の時に来ていただくんですね。家にお経をあげに、話をしますけれども、その時に自分がやってることとかつまづいてることとか話を色々しますけれども、共感していただこうと思ってないですね。ただ理解はして欲しいです。その共感と理解の違いがすごくあってあの世間知、世間の中のその私が今かかえていることと同じレベルにある必要はないと思うんですね。少し俯瞰をしていて、でもその状況がわかる。理解出来る。聞くこと傾聴することはできるという力がとても大事だなと思いました。それはそうと若い僧侶で信州の松代の蓮成寺っていうお寺ですけどそこから来ていただくんですけど、すごく頑張ってるんですね。お父さんの時代から来ていただいてるんですけれども、それは何か理解しようとしてる姿見ただけでも、親近感、結び合って行こうっていう風になりますね。それは経験であったり勉強であったり、自分よりちょっと大きいこと、過疎化も大事だと思うんですけれどももうちょっといろんなことにやっぱり関心を持って語り合ったり、そういう相手を見つけたり、ゴミ拾いでもいいと思うんですけどもそれを通じてあの理解力っていうものがやっぱり必須だなと思いますね。

小谷：ありがとうございます。理解をするためには相手に興味を持たないといけないと思うんですね。お坊さん達は、檀信徒の皆様のどれだ

けのことを知ってますか。やっぱり身近な自分の周りの地域とか、周りの人達に関心を持つ、話を聞いてみる。そこから始めるって言うのが私はすごく大事なんじゃないかなと。そしてあの評価ってお話でましたけれどもあのキャンベル先生はもう外部評価いいんじゃないのかとおっしゃいますけども。あの例えば私もずっとサラリーマンをしていたんですけど会社勤めは、自己評価されるんですよ。もちろん外から見る評価ってのもありますけど、僧侶の先生達もやってるやってるじゃなくて、可視化できる何か自己評価の基準っていうのをお持ちになってみたらいかがでしょうかね。例えばですけど会社だと今ペーパーレス化っての進めようとしています。１年間に使ったコピーいくら減らして、例えば紙は減らさないかもしれませんけど、例えば電気代をいくら減らして、それから何人の方がお参りに来られたか、コロナだから来ないかもしれませんけど、そういうなにか具体的な目標で、なんか去年より今年の方がなんか自分のやりがいが上がったなみたいな、数値化できるとなんか目標もできるのかなって思ったりいたしました。そろそろ時間が来そうなので最後に一言ずつお話もしていただきたいと思いますけれども、今日のタイトル「共に生きる尊さ誰も取り残さない社会の実現に向けて」ということですけれども。内藤さんから、お坊さんやこの仏教徒に対して、どういうメッセージをいただけますでしょうか？

内藤：最初に言った自分の認識を疑うことが、自分を信じないことが、まず第一歩なんじゃないかと思うんです。そうすることによって何かこう本を読もうだの、人に会おうだの、檀家さんの話聞こうだのという段階に進めるかなと思います。自分を疑いましょう。自分は大したものではありません。私自身も毎日のように私は大したものではない。自分は何も知らないと思って、一生懸命日々本を読んでいます。以上です。

キャンベル：今日はあのーSDGsが話の軸だったと思うんですけれども。あのそれを考える時に私は文化史の表現の歴史の専門家なので、そこで本当に伝来する様々な美しいもの、美術品、建造物、景観、それ言葉の中に日本語の中に仏教がたくさん意識をしなくても実は我々世俗の世界の中に生きてる脈打っているんですね。それがバラバラのその文化の中に溶け込んで融合していてそれが文化それは正しいとか間違ってるって事は言えないわけで、それを自然だと思うんですけれども。少しそこを、相対的に先ほどを平岡先生からヨーロッパのキリスト教はどうかっていう質問があったんですけれども。相対的にそれがどういうことなのかということを仏教の世界。特にこの宗門の中で、やっぱりどういう風にそれを自覚してそれが表現をするかと考えるべき時期じゃないかなっていうふうに思います。今日最初にその置き換わってる。お寺は必要にされてない、必要とされていない。床柱を背にして座っている人達は、あれは裸の王様であって、実はあれは、あの敬意、本当のその深い敬意を表していないかもしれないっていうことが、時代とともにやっぱり趨勢としてあると思います。同じものは同じようなものを再構築する必要ないしできないと思うんですが、ただこれほどを、広く深く日本のあらゆる文化、日本文化を下支えをしている仏教というものが、ただそのまま流されて何もなかったかのようになっていくってことは、私は日本にとっても世界に対してもとってももったいないことだと思います。非常に我々は、環境危機もそうですけれども、やっぱり民主主義社会がこれから本当に10年先20年先、本当に持つのかっていう、本当に大変な分岐点に立ってるわけですから、と言うとすぐ大げさに聞こえるかもしれませんけれども、私が仏教の世界の中から自分たちの足腰を強くしていく、その社会と連動して生きていく、持続できるSDGsということを自ら見出すということがとってもこれは大切なことだという風に今日皆さんの話を伺いながら確信しました。

小谷：ありがとうございます。平岡先生ひと言。

平岡：はい、何から始めるかということでちょっとひとつだけ。いまさっきひらめいたので一ついますと、まず檀家さんの前に家族じゃないかなと。奥さんの話を聞きましょう、子供の話を

聞きましょう、親の話を聞きましょう。それも、いやあそんなもんは、30年も連れ添っとるから知っとるわい、じゃなくって、この人はまるっきり他人だと思っていっぺん奥さんに接してみたらどうでしょうか。初めて会った、そんな感覚で子どもさんや奥さん、親と話すところから何か始まるかなという気がちょっとしました。

最後はまとめとして共生と共存の違いを小谷さんの方からも指摘していただきましたが、共生というのはいろんな人たちが関係を持ちながら、それも有意な関係を保ちながら存在する社会だと思います。共生を別の言葉で言い換えると、「自利即利他」だと思っています。自分の幸せと他者の幸せが、紙の裏表のようにピタッと１枚にひっついている。ということは利他のない自利、こらもう論外ですけども、自利のない利他も駄目です。これは完全に単なる自己犠牲でしかない。仏教の凄いところは、自分の幸せと他者の幸せを即の関係で見ているところだと思うんですね。私の言葉で言い換えると、「あなたを幸せにすることが私の幸せなんです。私の幸せはあなたを幸せにすることなんです」ということです。この精神に立ち返った時に、上から目線になれるはずがないんです。私は悟っているけどもお前を救ってやる、じゃないんですよ。私が幸せになりたいからあなたを幸せしようとしてるだけなんです。そうなると自己と他者が同じ目線に立てるのかなと思います。

これは小谷さんのアイデアですけども、昨日の私の話を聞いていただいて、世界平和の妄想お話ですけども、全員が円の周辺に出て真ん中に全員が共有できる目標をおきましょうということで、自然みたいなもんですかねって言ったんですけども、小谷さんがいやいやそれ SDGs じゃないですかと言われ、ああなるほどと思いました。SDGs の言葉に違和感があるんだったら共生でもいいじゃないですか、それは真ん中に空いた時に全てのものが円の周辺に出て手をつなぐことはできるかなのかなと思いました。そしてその SDGs に違和感があるのであれば、個々の項目見ていただくと、本当に素晴らしいものですから、その中のどれか一つでもいいじゃないですか、私はそれをブレイクダウンした時には何ができるんだろうかってことを考えた時に、少し SDGs との関わりができるのかなと思いました。以上です。

小谷：ありがとうございます。私はあの究極の結論は、あのお坊さんが衆生を救うなんてことはとんでもない傲慢で、あのお坊さんも衆生もみんな生きがいを持って幸せに暮らせる社会はどうしたらいいでしょうかって言う事なんか考えることが本当の SDGs なんじゃないのかなと私は思っています。その意味でなんかいろいろ言いたい放題いわせていただきましたけれども、御僧侶の先生方もご自身の周り日々の生活を思い浮かべていただきまして、あの僧侶である前に一社会の一員として自分は、地域や地球に何ができるのかっていうことにもう少し関心を持っていただき、身近な人たちに関心を持ち、何ができるのかってことを私も含め考えていけるような社会にしていきたいなと思っています。時間が参りましたのでこの辺で終わらせていただきたいと思います。パネルリストの先生どうもありがとうございました。

司会：以上でパネルディスカッションを終了いたします。改めましてコーディネーターの小谷みどり様、パネラーの内藤麻里子様、ロバートキャンベル様、平岡聡様に大きな拍手をお願いいたします。皆様ありがとうございました。それではこれより閉会式の準備を行いますので準備が整いますまで今しばらくお待ちくださいませ。

第46回 全日本仏教徒会議
山梨・身延山大会

主催　(公財)全日本仏教会　山梨県仏教会
共催　日蓮宗総本山身延山久遠寺
後援　(公財)仏教伝道協会　(公社)やまなし観光推進機構　テレビ山梨
山梨日日新聞・山梨放送　朝日新聞甲府総局　毎日新聞甲府支局

実行委員会一覧

大会総裁	大谷暢裕				
大会副総裁	五條良知	髙山久照			
大会名誉会長	内野日総				
大会名誉顧問	持田日勇				
大会会長	近藤英夫				
大会副会長	鈴木　哲	伊丹信匡	佐藤光政	阿部信顯	鷲津義芳
	青柳真元	髙柳了志	新田了英	姉川慈航	鷹野慈誠
	望月海俊	原田正明	岡本正富	松永直樹	浜島典彦
実行委員長	松永直樹				
副実行委員長	鈴木　哲	伊丹信匡	豊田慈證	青山恭謙	
監事	清雲俊雄	林　弘宣			
相談役	奈良慈徹				

事務局	局長	長澤宏昌	次長	小澤惠修		
	主任	鈴木義俊	副主任	加賀美賢次		
	局員	金　順祐	岡村達人	板倉本諭	高野令行	内藤和心
総務部会	部長	松本学堯	副部長	山本是温		
	部員	秋山義行	鈴木義承	氏原孝学	池田豪志	佐々木博司
		望月晶世	山本　太	佐野典一	小田切孝美	五十嵐陽介
企画部会	部長	池上要靖	副部長	林　是恭		
	部員	望月本謙	橋爪一明	望月瑞代		
式典部会	部長	青山恭謙	副部長	井上照淳	千野宗雄	
	部員	栗原宣如	大窪信征	新田是宣	伊藤　治	遠山正真
		槇野晋平	松山典嗣	本間裕教	樋口雄文	灘上法幸
		山田是佑	筒井治稔	松崎前宏	及川是教	
情宣部会	部長	豊田慈證	副部長	川野千佐		
	部員	諏訪是隆	橋爪一明	箕島法道	茂手木美里	河又浩昭
財務部会	部長	長谷川寛清	副部長	佐野慈一		
	部員	杉沢栄孝				

参加人数

現地参加：660人（両日延べ・１日目：350人，２日目：310人）
リモート参加：（YouTube 身延山久遠寺公式チャンネル）／配信終了後１週間
７日前半（開会式・記念講演）
視聴回数 1,435回、インプレッション数 約18,000回
７日後半（現代音楽法要） 視聴回数　995回、インプレッション数 約 7,500回
８日（記念法要・パネルディスカッション・閉会式典）
視聴回数 1,314回、インプレッション数 約18,000回

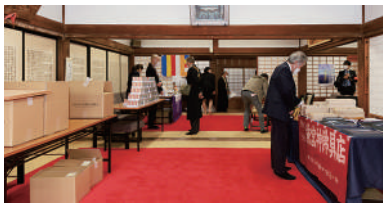
協賛団体一覧

（申し込み日順・敬称略）

融通念佛宗
一般財団法人埼玉県佛教会
公益財団法人仏教伝道協会
真言宗豊山派
築地本願寺
日蓮宗
天台宗
曹洞宗
真宗大谷派東本願寺
浄土宗
大阪府佛教会
日蓮宗山静教区
山梨県仏教会
福島県仏教会
真言宗智山派
浄土真宗本願寺派
有限会社新宿アカウンティング
　オフィス
公益社団法人 全日本仏教婦人連盟
念法眞教
金峯山寺
全日本仏教青年会
身延山久遠寺
株式会社藤岡光影堂
有限会社山縣塗装店
こくや神仏具店
田中社寺株式会社
株式会社丸井紙店
弁護士法人長谷川法律事務所
株式会社朱宮仏具店
シティーメンテナンス株式会社
株式会社プランドゥワカツキ
株式会社インテリアさの
かえで総合保険株式会社
有限会社山梨消防防災センター
株式会社藤原
山日 YBS グループ
有限会社塩津石材店
山梨県石材加工業協同組合
ウエダジャパン
株式会社翠雲堂
有限会社高橋鉄工所
山梨中央銀行身延支店
株式会社アクアテック
大和証券株式会社
全日本葬祭業協同組合連合会
株式会社マルモ
鳴沢・渡辺石材店
民宿 ともゑ
大川石材店
山中湖石材店
中村土木石材
株式会社野村石材
幸長石材店
有限会社上信堂
望月石材店
リコージャパン株式会社山梨支社
下部ホテル
フューネラルサロン縁（ゆかり）
山一葬祭
野村證券株式会社 甲府支店
若松屋数珠仏具店
株式会社大松・きもの大松
有限会社政門石材店
浪花屋珠数仏具店
有限会社フジモリ設備
NSW 株式会社
中央ドライクリーニング
三菱 UFJ モルガン・スタンレー
　証券株式会社 立川支店
株式会社水澤工務店
山梨交通株式会社
株式会社小野石材店
株式会社アピオセレモニー
身延登山鉄道株式会社
富士急行株式会社
甘養亭河喜
日本連合警備株式会社
株式会社早野組
株式会社秋山
株式会社テレビ山梨
株式会社イーフォー

ブース出展団体一覧

イワトー株式会社みのはん
大和証券株式会社
株式会社朱宮神仏具店
身延珠数土産品協同組合
身延町
（公財）仏教伝道協会
（公財）全日本仏教会



報道（紙面）より

日蓮宗新聞

2022年11月1日付

本堂で営まれた現代音楽法要

全日本仏教会

全日本仏教徒会議　山梨・身延山大会

『共に生きる尊さ』～だれも取り残さない社会の実現に向けて～

挨拶する全日仏の大谷暢裕会長

全日本仏教会（以下＝全日仏）と山梨県仏教会は山梨県総本山身延山久遠寺で第46回全日本仏教徒会議・山梨・身延山大会を10月7、8日に開催した。2015年に国連サミットで採択された「持続可能な開発目標（SDGs）」に沿い、大会テーマを「共に生きる尊さ」～だれも取り残さない社会の実現に向けて～」と置き、SDGs時代の仏教の役割を探るため、全日仏加盟の超宗派の僧侶らが全国から集い、またオンラインで配信された。

◆世界・地球の将来のために

開会式では大会長の近藤英夫山梨県仏教会長（浄土真宗本願寺派）が「世界・地球の将来のために仏教徒として1人ひとりが取り組んでいくべきことを提言していきたい」と大会目標を述べた。大会名誉会長で久遠寺法主の内野日総猊下は、全国仏教徒の来山に心からの歓迎の意を表された後、「極端な意見や言論が耳に入りやすい現代の情報社会のなかで、いかにサイレントマジョリティー（声なき声）や声を上げられない人の心の叫びを汲もうかが仏教徒として必要。変化の激しい今こそ、人の善を信じる心や世の中を良い方向に動かしていく強い意思を」と呼びかけられた。

◆現代における仏教の可能性

近藤大会長が講師を務めた開会法要に続き、京都文教学園長・京都文教大学教授の平岡聡師（浄土宗）が「現代における仏教の可能性を問う」と題した記念講演を行った。平岡師は仏教が現代の問題に向き合っていないと揶揄される現状を話すとともに、現代社会の特徴である「①自我の肥大化／②脳化による身体性の欠如／③死の隠蔽／④神話性の促進」について仏教でアプローチできることを示唆した。①では自己を絶対化せずに縁起により相対化させること、②では「心が理解する」と「行動（体）」が変わる」と思われがちだが、八正道などの仏教の修行（行動）をすると心が変わることから身体性の重要さを説いた。③は「あなた」という2人称の死から「わたし」はどう生きるかという1人称に導くことが仏教の役割と話し、④は事なかれを上とせず、科学の知だけでは納得できない場合、納得できる“物語”が必要であり、仏典はその宝庫だということを話した。⑤は曼荼羅の世界を例に挙げ、単に仏が並存しているのではなく、共存しおり、互いが関係を持つことにより共生になるとした。ただし、これを実践するためには僧侶の聖性の必要性や仏教を再生する新時代の僧侶のリーダー的存在となる「仏」の出現が重要とした。

初日最後には内野猊下を大導師に本堂で「現代音楽法要」が営まれた。日蓮聖人第700遠忌記念「日蓮大仏」が制作した「オラトリオ日蓮大仏」が随所に織り込まれ、弦楽と女声・男声の調べが堂内に響き渡り、仏教の神秘性を表現した特別な法要となった。

8日は全日仏会長で真言宗谷派の大谷紀隆裕門主が導師を務め、大会会長は「真の平和のために」と題した。大谷会長は「何を希求し、人間1人ひとりが尊重し合い、どこまでも対話をもって相手と向き合う姿勢が必要不可欠」と挨拶した。

◆隣と行をSDGsに

続いて「だれも取り残さない社会の実現に向けて」と題してパネルディスカッションが行われた。初めにシニア生活文化研究所代表理事で身延山大学客員教授の小谷みどり氏が、山梨県内寺院で実施したSDGsに関するアンケート調査から、ジェンダーや人権などへの僧侶の関心の低さを報告した。続いてパネラーの文芸ジャーナリストの内藤麻里子氏、東京大学名誉教授のロバート・キャンベル氏、平岡師の3人が報告に関して意見を述べた。内藤氏は「自分の認識を疑うべき、SDGsという目標を知ることで意識が変わる」、キャンベル氏は「地域と接点を持ち、生きる宗教・社会貢献本のインフラになるかがポイント」、平岡師は「菩薩の基本『隣と行』をSDGsの項目に置き換え、具体的どういう行動がとれるのか。願いがあることによって自分も変わることができる」とした。

◆仏教と民主主義を強く

コーディネーターとしてテイスカッションを進めた小谷氏は参加している僧侶に向け「生きがいを持っていますか？　幸せですか？」と問いかけ、サイレントマジョリティーの声を聞くために、まず自分を尊ぶことを説いた。そのなかで、キャンベル氏は一仏性術や生をまっとうするための価値を今の人びとは仏教に求めていないのか？それでいいのか？生き方を学びや相談できる場所としてお寺を使うべき」と仏教の再構築を提案し「仏教が何もなかったことにならればいいなと。それでいいのか？」と問いかけ、「民主主義も10年先までもつのかもわからない。仏教で民度を強くすることができる」と期待した。最後に小谷氏は「僧侶も常生もみんな生きがいをもって生きることができる」とした。

閉会式では、大会実行委員長の松永直樹師（日蓮宗）が「生きと生けるものが共に喜びを述べた。内藤氏は「自分の認識を疑うべき、SDGsという目標を知ることで意識が変わる」、キャンベル氏は「地域と接点を持ち、生きる宗教・社会貢献本のインフラ」、イスラム教のエビンキャンの人たちが弾圧され難民になっている。私たちもなんらかのきっかけで弾圧する側にまわる可能性がある」と自戒を込めた。

全日本仏教徒会議・山梨身延山大会開く

全日本仏教会と山梨県仏教会は山梨県総本山身延山久遠寺で全日本仏教徒会議・山梨・身延山大会を10月7、8日に開催した。（写真は大会会長として挨拶される内野日総法主猊下）【記事2面】

尊重し合い、どこまでも対話を

大谷全日仏会長

声なき声の叫びを汲もう

内野大会名誉会長

「だれも取り残さない社会の実現に向けて」がテーマのパネルディスカッションに参加したパネリスト。左上から小谷みどり氏、平岡聡師、内藤麻里子氏、ロバート・キャンベル氏

中外日報

2022年10月12日付

全国から各派の僧侶が集まって行われた開会式典

全日本仏教徒会議

平和実現へ行動誓う

山梨・身延山大会

「共に生きる尊さ」宣言

第46回全日本仏教徒会議山梨・身延山大会が7、8日、山梨県身延町の日蓮宗総本山身延山久遠寺・身延山大で開かれた。全日本仏教会と山梨県仏教会の共催で、「共に生きる尊さ～だれも取り残さない社会の実現に向けて～」がテーマ。平和な世界の実現に向けて行動し、互いを尊重し合う世の中を目指すと宣言した。（有吉英治）

前回の島根大会は新型コロナウイルスの感染拡大防止のため会期を半日に短縮し、ほぼオンライン参加のみで行った。今回は従来通り2日間とし、会場に約450人が集まり、オンラインも併用した。山梨県での開催は1955年に身延山で開かれた第3回以来67年ぶり。

身延山大の講堂で行われた開会式典で、近藤英夫・大会会長（山梨県仏教会会長、浄土真宗本願寺派）は「SDGsが『持続可能』『誰一人取り残さない』としているのは、このままでは持続することが不可能と考えられ、取り残されている人がいるということ。未来を見通して、続けていくことができる生活の在り方が強く求められている」と述べた。

近藤会長の導師で開会法要を営んだ後、平岡聡・京都文教大教授が「現代における仏教の可能性を問う」の演題で記念講演。そして本堂に移動して内野日総・久遠寺法主を導師に現代音楽法要を営んだ。

8日は身延山大講堂で、大谷暢裕・大会総裁（全日本仏教会会長、真宗大谷派門首）の導師で大会記念法要を行い、仏旗と法輪旗の前で念仏を称えた。大谷総裁は「仏陀は非暴力を貫く生き方を示された。真の平和の希求には、一人一人が互いに尊重し合い、どこまでも積極的な対話をもって相手と向き合う姿勢が必要不可欠。皆が共に安らかに生きるため、多様な人々が考えを持ち寄って共に語り始めることは重要な一歩であるはず」と挨拶した。

「だれも取り残さない社会の実現に向けて」をテーマにパネルディスカッションを行い、最後に松永直樹・大会実行委員長（日蓮宗）が「私たち仏教徒は、人は行いにより尊くも卑しくもなるという釈尊の御教えを強く受け止め、決して傍観者でいることなく今起きている現実に目を向け、生きとし生けるものが共に生きられる平和な社会の実現に向けて行動し、常に感謝の気持ちを持ちながら、互いを尊重し合う社会を目指すことを誓います」との大会宣言を発表した。次回大会の会場は大阪で、大会旗が村山廣甫・大阪府仏教会会長に引き継がれた。

2022年10月14日付

全日本仏教徒会議

門首導師の念仏、身延山に

日蓮宗総本山身延山久遠寺（山梨県身延町）で7、8日に開かれた第46回全日本仏教徒会議山梨・身延山大会に、全日本仏教会会長の大谷暢裕・真宗大谷派門首が大会総裁として出席した。記念法要の導師を勤め、『仏説無量寿経』重誓偈を読誦し念仏を称えた。山内に門首導師による念仏が響いたのは初めてではないかと山内関係者は話している。

大谷門首は8日午前8時頃、同寺に到着。内野日総法主をはじめ役職者が出迎えた＝**写真**。大会行事は「身延山現代音楽法要」を除き、隣接する身延山大の講堂で行われた。大会中、講堂の宝前には幕が掛けられ、仏旗と法輪旗が掲げられた。

7日の開会法要は大会会長の近藤英夫・山梨県仏教会会長（浄土真宗本願寺派）、8日の記念法要は大谷門首の導師で、それぞれの宗派僧侶が出仕した。

身延山で同大会が開かれるのは1955年以来67年ぶりで、当時の法要については詳細な記録が残っていないという。

現代音楽法要は、本堂で内野法主の導師により営まれた。81年の日蓮聖人第700遠忌を記念して制作された、黛敏郎作曲、西川満作詞の大作「オラトリオ日蓮聖人」から、要所を抜き出し法要に組み入れた。声楽とバイオリンなどの演奏が出仕僧の読経唱題と融和し、様々な宗派の僧侶に新しい形の法要を提示した。

「声なき声をくむ」

▼開会法要の前に行われた開会式典では、内野日総・日蓮宗総本山身延山久遠寺法主が大会名誉会長として挨拶に立った。

「昭和、平成、令和と時代が変化する中、再び身延山久遠寺で開催される心や、世の中を良い方向に動かしていこうとすると同時に、実に光栄」と述べ、約750年前の日蓮聖人入山により多くの文化が伝承され、身延は和紙の里、硯の里などの伝統が息づく文化的な地域と紹介した。

その上で、現在は日蓮聖人が生きた中世日本と同様に多くの試練に翻弄されているとして「情報洪水社会の現代、極端な意見が耳に入りやすくなっており、今後はサイレントマジョリティー（声なき声）や、声を上げられない人の心の叫びをいかにくむかが、仏教徒にとって必要な取り組みになっていく。変化の激しい今こそ、人の善を信じ、人を生きる尊さを信じるという意思を強く持っていこうではありませんか」と呼び掛けた。

仏教タイムス

2022年10月13日付

共に生きる尊さ―だれも取り残さない社会の実現に向けて

第46回 全日本仏教徒会議 山梨・身延山大会

「互いを尊重し合う社会」誓う

約450人が参加して身延山大学講堂で行われた開会式典

「共に生きる尊さ―だれも取り残さない社会の実現に向けて」のテーマのもと第46回全日本仏教徒会議山梨・身延山大会が7・8の両日、山梨県身延町の日蓮宗総本山身延山久遠寺で開催された。全国から約450人が参加し、記念講演や宗派法要・テーマに沿ったパネルディスカッションに臨んだ。大会宣言では、「互いを尊重し合う社会を目指すことを誓います」と結んだ。身延山での開催は第3回大会以来37年ぶり。大会は全日本仏教会と山梨県仏教会が主催し、身延山久遠寺が共催した。

全国から450人が参加

初日は雨に見舞われたものの、スケジュール通りに進行。身延山大学講堂で開会式典・法要・記念講演が行われ、本堂で現代音楽法要が営まれた。山梨県仏の近藤美天会長（本願寺派）は「将来に、祖師の頃は圧倒的に多くの仏教者としてわたしたち一人ひとりが取り組むべきこと」と発揮していきたい」と表明。96歳の身延山久遠寺の内野日総法主は歓迎の言葉を述べると共に、「仏法（仏の教え）僧（法の実践者集団）仏（僧のリーダー的存在）について話し、檀家制度と菩提寺制が「志のない出家者を輩出する装置となっている」と嘆じた。一方で、「寺檀制度が崩壊してきた」と生きる尊さ―たれも取り残さない社会の実現に向けて」のテーマ

挨拶する内野日総大会名誉会長（久遠寺法主）

情報が少ない時代」であり、「智慧で迷路を乗り越えるしかなかったことでしょう」と仏教の智慧に期待を寄せた。

「記念講演は早岡聡・京都文教学園学園長（宗都文教学園学園長）が「現代に対する仏教の可能性を問う」をテーマに、「仏法（仏の教え）僧（法の実践者集団）仏（僧のリーダー的存在）について話し、檀家制度と菩提寺制が「志のない出家者を輩出する装置となっている」と嘆じた。一方で、「寺檀制度が崩壊してきされたあと、次回開催地である大阪仏教会の村山廣甫会長（曹洞宗）に手渡された。2年後の大阪・関西万博に併せた開催となる、大阪では第10回大会（1962）、第34回大会（1996）以来、3度目となる。

僧侶が社会から取り残されている

SDGsアンケート

現代音楽法要では「オラトリオ日蓮聖人」が披露された（久遠寺本堂）

身延を離れ祖上に向かう「入滅」がクラシック音楽、雨奏、谷崎、行題目によって演奏された。

パネル討論

2日目は大学講堂でパネルディスカッション。山梨県内寺院を対象としたSDGs（持続可能な開発目標）に関するアンケート調査が報告され、分析を担当した身延山大学客員教授の小谷みどり氏（シニア生活文化研究所代表理事）は、回収率の低さや寺院の関心と活動の低調ぶりを指摘。SDGsの理念である「誰一人取り残さない」とテーマを金箔に小谷氏は「僧侶が社会から取り残されている」とシンプルに分析した。

この報告を受けて内藤麻里子氏（文芸ジャーナリスト）、ロバート・キャンベル氏（日本文学研究者）、平岡聡氏の3人が発題し、全体討論が行われた。総じて僧侶に対して厳しい発言や注文が相次いだ。

大会締め括りの閉会式では、大会宣言を採択した後に、終了セレモニーのロンギャ問題（関西・関東）を紹介する追加発言が承認された（別掲）。

次回開催地は大阪

大会旗が全日仏に返還

大会宣言

私たち仏教徒は、人は行いにより尊ぶも卑しくもなるという釈尊の御教えを強く受け止め、決して憎悪しているようなことを今起きている現実に目を向け、生きとし生けるものが共に生きられる平和な社会の実現に向けて行動し、常に感謝の念持ちを持たながら、互いを尊重し合う社会を目指すことを誓います。

弾圧する側の可能性も

松永直樹大会実行委員長の追加発言　今ロシア軍の非道なウクライナ侵攻問題があります。しかし私たちも仏教徒として考えなければならないことがあります。私たちと同じ仏教徒であるミャンマーの人たちも、イスラーム教徒であるロヒンギャの人たちが弾圧され難民化しています。このことは私たちも何らかのきっかけで弾圧する側に回る可能性があることを示しています。改めて、先ほどの宣言の中に「互いに尊重し合う社会」という言葉の重要性を感じます と共に考えたいと思います。

2022年10月27日付

全日本仏教徒会議 山梨・身延山大会

SDGs 僧侶の関心は低く

注文相次ぐ

7・8日の両日、山梨県身延町の日蓮宗総本山身延山久遠寺で開催された全日本仏教徒会議では、浄土宗信者（宗都文教学園の理事長）の記念講演や大会開催地である山梨県の寺院を対象としたSDGs（持続可能な開発目標）調査の結果を受けたパネル討論が行われ、今後の僧侶や寺院のあり方が模索された。

記念講演

平岡氏は、「現代における仏教の可能性を問う」と題して講演した。今後の社会の向性として、自己の歴史化・多様性の重視へと向かう「共生」、「死」の重視へと向かう「無蔵」、多様性の重視へと向かう「共生」、「死」の重視へと向かう「無蔵」、「死」の重視へと向かう「無蔵」、「死」の重視へと向かう「無蔵

文化時報

2022年10月18日付

全日本仏教徒会議

宗派超え 聖地で一つ

山梨・身延山大会に400人

公益財団法人全日本仏教会（会長、大谷暢裕・真宗大谷派門首）と山梨県仏教会は7、8の両日、日蓮宗総本山身延山久遠寺（内野日総法主、山梨県身延町）で第46回全日本仏教徒会議山梨・身延山大会を開いた。全国から伝統仏教教団の代表者や檀家・門信徒など約400人が参加。法要や講演、パネルディスカッションなどを行い、日蓮宗の「聖地」で宗派や経典を超えて結束を誓った。（山根陽一）＝4面に関連記事

あいさつする内野日総法主（左）と大谷暢裕門首

大会のテーマは「共に生きる尊さ～だれも取り残さない社会の実現に向けて」。7日の開会式典では、大会会長を務めた山梨県仏教会会長の近藤英夫・浄土真宗本願寺派林照寺（山梨県甲州市）住職が、持続可能な開発目標（SDGs）＝用語解説＝に沿ったテーマ。日本でも気候変動は身近な出来事になっており、仏教徒一人一人が身をもって取り組んでいくべきだ」とあいさつした。

続いて大会名誉会長の内野法主が「中世日本は戦乱や貧困で困難に満ちた時代だったが、日蓮聖人は智慧や情熱で逆境を乗り越えた」と語った上で「過度の情報にあふれた現代は、声なき声をくむことが仏教徒の使命である」と述べた。

2日目は暢裕門首の導師で大会記念法要が営まれた。あいさつで暢裕門首は「国家間の紛争で多くの命が失われている。ブッダが言う『全ての生命はいとおしい。殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ』という非暴力を貫くことが重要だ」と説いた。

閉会式では全日仏の里雄康意理事長が「立場の弱い人々が虐げられる今、自分さえ良ければよいという生き方は考え直す必要がある。思想や信条を超えて他者と水平に出会う道を見いだしたい」と述べた。

来年の第47回大会は大阪府仏教会が全日仏と共に主催する。日程や会場などは調整中。

全日本仏教徒会議山梨・身延山大会

SDGs巡り提言続々

有識者、僧侶の意識に苦言

日蓮宗総本山身延山久遠寺（内野日総法主、山梨県身延町）で行われた第46回全日本仏教徒会議山梨・身延山大会。7日には内野法主の導師で「身延山現代音楽法要」が営まれた。7日の記念講演を受けた8日のパネルディスカッションでは、持続可能な開発目標（SDGs）を巡る提言が相次ぎ、僧侶が社会から取り残されることへの危機感を指摘する声も上がった。

＝1面参照

身延山現代音楽法要では、鷹敏郎氏が作曲、西川満氏が作詞した「オラトリオ日蓮聖人」が演奏され、日蓮聖人をたたえる劇的な物語をオーケストラに乗せて独唱・歌唱で表現。宗派を超えた僧侶の聴衆を魅了した。

記念講演は浄土宗僧侶で京都文教学園学園長・京都文教大学教授の平岡聡氏が「現代における仏教の可能性を問う」と題して話した。

平岡氏は「科学技術が進歩し、人工知能や仮想空間が日常化すると、人間の『身体性』が失われ、人間＝脳のような錯覚に陥る。身体性の欠如は死の隠蔽を促進し、人間は精神的な窒息状態に陥る」と、現代に生きる人間の姿を分析。仏教が培ってきた思想が問題解決の重要な手掛かりになると伝えた上で「今後は檀家や門信徒だけではなく、より多くの人へ法を説き、情報発信していくべきだ」と訴えた。

パネルディスカッションは「だれも取り残さない社会の実現に向けて」をテーマに、身延山大学客員教授の小谷みどり氏をコーディネーターに、平岡氏、日本文学研究者で早稲田大学特命教授のロバート・キャンベル氏、文芸ジャーナリストの内藤麻里子氏が発言した。

冒頭で小谷氏が、山梨県内の841カ寺を対象に行ったSDGsへの意識や取り組みに関する調査について報告。「回収率が3割と非常に低く、SDGsをよく知らない人が3割を超え、内容をよく知っている人は1割にも満たない。このままでは僧侶が社会から取り残されてしまう」と苦言を呈した。

さらに、ジェンダー（社会的性差）の平等に関心の高い僧侶ほど、地域住民との交流や寺の活性化に取り組んでいる割合が高いとの結果を示した。

平岡氏は、これからの僧侶は勉学と修行に加えてフィールドワークを実践する必要があると強調。「生老病死の現場である医療や介護施設へ、積極的に足を運ぶべきだ」と語った。

キャンベル氏は自身が性的少数者＝用語解説＝である立場から日本は芸術（音楽、言葉、景観）、そして伝統仏教と、美しいものにあふれている。それを相対的に捉え、自分自身が『裸の王様』になっていないか、差別を黙視していないか検証してみてはどうかと提案した。

内藤氏は、文学作品を積極的に読むことを勧め「人は固有の価値観や習性を持つが、それは皆同じ。その苦悩や痛みを分かち合うのが人間だと、優れた小説は教えてくれる」と強調。「自分を信じ、新たな可能性を求めて貪欲に吸収する姿勢を常に持ち続けてほしい」と語り掛けた。

㊤日蓮聖人の物語を描いた身延山現代音楽法要
㊦仏教界への提言が相次いだパネルディスカッション

身延山久遠寺公式サイト
全日本仏教徒会議のページ

YouTube
身延山久遠寺公式チャンネル
全日本仏教徒会議アーカイブ

第46回 全日本仏教徒会議 山梨・身延山大会

紀　要

発行日　2023年６月17日
発行者　公益財団法人 全日本仏教会
　　山梨県仏教会
編集者　第46回 全日本仏教徒会議 山梨・身延山大会 実行委員会
印刷所　株式会社イーフォー